

# 海外に見る「過疎化」がもたらす影響(Ⅰ)

—中国・延辺朝鮮族自治州延吉市—  
—「留守児童」の事例研究(研究1)・調査研究(研究2)—

張 麗 花

坂 西 友 秀

埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座

キーワード:「留守児童」、「出稼ぎ」、朝鮮族自治州、過疎化、子どもの発達

## 研究全体の目的

本研究は、2回に亘って海外における地域の「過疎化」問題を取りあげる。中国東北部の延辺朝鮮族自治州では、両親または片方の親が、よりよい収入や教育を求め大都市および海外に一時的に移住する「出稼ぎ」が盛んである。親が「出稼ぎ」に出ている間は、子どもたちは「留守家庭」に残され、父親か母親に育てられる。両親共に「出稼ぎ」に出る場合には、子どもは祖父母や他の親族に預けられ養育されることが多い。「出稼ぎ」で親が家を「留守」にする期間は一時的とはいえ、多くの日本人が想像するであろう数ヶ月から1年間という短期ではない。多くの場合、数年から10年以上にも及ぶ。学童期の子どもが、親から離れて生活することが延辺朝鮮族自治州では、一般化しているのである。本研究の目的は、こうした親の長期に亘る「出稼ぎ」の現実を、家庭に残された子ども自身の経験・体験を聞き取ることによって、子どもの視点から彼らの内面世界を中心に質的に明らかにすることである(研究1)。また、親の出稼ぎが、小学校段階で進行する実態を質問紙調査によって統計的に明らかにすることを目的とする(研究2)。なお、本研究では紙幅の都合で研究1のみを記載する。研究2については次回の紀要で報告する。

## 1 地理・概況

延辺地区は中国の東北三省の中の吉林省にあり、ロシア、北朝鮮と国境を接し、東端はわずかに日本海に接する。延辺(Yuanbian)州の人口は、2010年現在219万人で、約67%は非農業人口だ。民族は、朝鮮族が37%、漢民族が60%を占めている(日本貿易振興機構、2012)。6市2県から成り、州都が延吉(Yanji)である。中国の行政区は、省、県、郷の三段階制を基本にする(在日中国大使館、2009)。全国には省、自治区、直轄市が、さらに省、自治区には自治州、県、自治県、市が置かれている。自治州には県、自治県、市が置かれているが、自治区、自治州、自治県はいずれも民族自治区域である。56もの民族からなる中国ならではの自治区域である。我々が訪れた延吉市の属する延辺州は、朝鮮族の人口割合が大きく、自治州である。したがって、延吉市は、吉林省延辺朝鮮族自治州延吉市と表記される(図1)。

吉林省は、「満洲國」の一部であった。帝政ロシアが英国に対するためにシベリア・モンゴル・「満洲」にかけて都市建設を図った南下政策と、対露戦略で日本が進めた中国東北部への植民地政策とがあり、ロシアと日本が対峙することになった(山本、2011)。「満洲」は満洲族の民族名で、地名ではない。日本が傀儡国家として建国したのが「満洲國」で、黒竜江省、遼寧省、吉林省とモンゴルの一部を合わせた一帯である(山本、2011)。

(注) 本研究は、2014年度の埼玉大学大学院教育学研究科に提出した張麗花の修士論文に加筆したものである。

1990年代以降、労働力の輸出が延辺の経済成長の主要手段となり、地域的、言語的に優勢な韓国への朝鮮族の出稼ぎ（「コリアン・ドリーム」）が増加した。1978年の「改革開放政策」は、朝鮮族農民の都市部への、さらには韓国への進出と出稼ぎにつながった。1992 中韓国交樹立も韓国への出稼ぎを促進する要因だった（金、2012）。2007年から2011年の対外貿易国別統計では、相手国はロシア、韓国、日本、米国の順であり、延辺州と韓国の強い関係が表れている。2008年までは北朝鮮との貿易も計上されていた（日本貿易振興機構（ジェトロ）大連事務所 2012）。

延辺区は、北はロシアと東南は北朝鮮と国境を接する高緯度地帯に位置し、冬期には河川湖沼はすべて凍結する。延辺には朝鮮族の住民が多く、朝鮮半島と密接な関係にある。中国の朝鮮族の総人口は（2005年現在）192万3,800人で、主に吉林省延辺朝鮮族自治州に暮らす（他に黒竜江省、遼寧省、内蒙古自治区等）。使用言語は、朝鮮語と朝鮮文字である。56個の少数民族中国族と満洲族が漢語を、他は自民族の言語を使う（中華人民共和国駐大阪総領事館、2014）。

延吉市朝鮮族住民（以下朝鮮族）には「出稼ぎ」をする人が多く、その出先は初期には韓国だった。朝鮮族の生活は、1900年代に農業中心の暮らしから現金収入を求めて隣国の工場や会社・企業で働く賃金労働者の生活へと大きく変化した。「出稼ぎ」増加には、中国、日本、韓国等東アジア諸国の都市化・工業化の進展が深く関わっている。

延辺は、現在「朝鮮族自治州」だ。吉林省の東部に位置し、東端は中国、ロシア、朝鮮に挟まれ日本海に隣接している。1952年に延辺朝鮮民族自治区に、1955年からは延辺朝鮮族自治州に移行した。東北三省（吉林、遼寧省、黒竜江省）の海外交流の窓口であり、経済・人口・地理の中心地である。州の人口は2271,600人である。朝鮮族の人口は全州人口の38.55%（2000年）で、

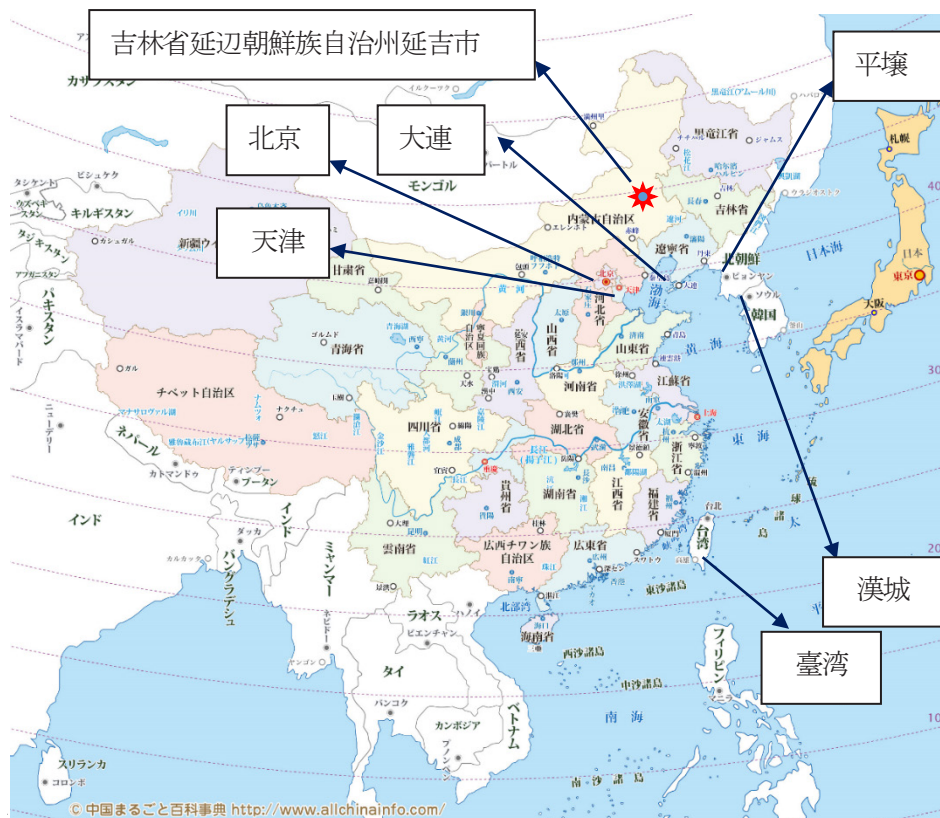


図1 東アジア全体図と吉林省延辺朝鮮族自治州  
(中国まるごと百科事典、2014より：四角内は著者書き込み)

1952年の62.01%より23.46%も減少している(中華人民共和国駐大阪総領事館、2013年7月5日)。

延辺州延吉市は日本海に面し、韓国(延吉—羅津—釜山、延吉—琿春—ザルビノ—束草)への定期航路も用意されている。外資企業を誘致する積極的政策を実施し、西部大開発政策や東北老工業基地振興政策が実施され、企業誘致と投資の勧誘・奨励が盛んに行われている。延辺朝鮮族自治州と日本の関係は深く、1980年代までは日本語が第一外国語として学校教育で行われていた。その後は、国際化の進展に伴い、英語教育が盛んになっているが、日本語教育は積極的に行われている(山本、2011)。

## 2 出稼ぎが子どもに及ぼした悪影響

海外への「出稼ぎ」は、延辺地区の経済的成長を高め、人々の生活を豊かにさせた一方、一つの社会問題を生み出した。いわゆる「留守児童」である。2011年まで延辺地区の出稼ぎ人数は15万人、「留守児童」は52,000人くらいである。なお、留守児童は、次のように定義されている。「両方または片方の親がほかの地区や国に出稼ぎに行き、子どもが地元の実家に残され、保護者の元で暮らしたり、または一人暮らしをしたりしている18歳未満の未成年者」(州委办公室、2011)。統計によると、現在延辺地区の「留守児童」は全児童の30%であり、その中で朝鮮族の割合が高い。朝鮮族の小学校、中学校、高校の「留守児童」の人数は、それぞれ51.28%、60.23%、60.20%を占めている。また、「留守児童」の保護は者片方の親が54.31%、祖父祖母が29.08%、親戚が12.27%、学校が1.71%だった。

ところで、武吉(2008)は、『留守児童』を両親とも出稼ぎに行っている農民が郷里に残した子どもを指す」と定義している。「留守児童」問題は、農民の出稼ぎに関わる問題として論じられることが多く、主に中国南部に集中しているといわれる。北村(2012)は、中国国内の調査を元に「留守児童」を次のように紹介する。「農村部に残されている子供たちを『農村留守児童』と呼ぶ。2010年5月25日に“中華全国婦女聯合会”(略称:全国婦聯)が初めて発表した「農村留守児童家庭教育活動調査分析報告」によれば、全国の農村留守児童の実態は以下の通りであった:

1. 全国の農村留守児童の総数は約5,800万人で、そのうち、満14歳以下の農村留守児童は約4,000万人であった。5,800万人という数字は全国の農村児童の28.29%を占め、農村児童の4人に1人は留守児童であることを意味する。

2. 留守児童の分布は中部・南部の省に集中しており、四川省、安徽省、河南省、広東省、湖南省、江西省の6省の留守児童の合計は全国留守児童総数の過半数を占めている。

3. 今回の調査は54万戸の農村留守児童家庭を対象として行われたが、その結果は次の通りであった(以下「農村留守児童」を「留守児童」と略す)。

(a) 出稼ぎ期間が1年以上の保護者が60%以上を占め、保護者と留守児童とを結ぶ主要な連絡方式は電話であった。連絡を取る頻度は、毎日1回が32.9%、毎週1回が39.8%、毎月1回が21.1%、毎年1回が4.9%、全く連絡がないが1.3%であった。

(b) 父母が身近にいないことで、41.5%の留守児童は孤独を感じ、26.9%の留守児童は勉強を見てくれる人がいないと考え、15.4%の留守児童は誰も世話をしてくれる人がいないと考えている。これらを総合すると、父母の愛情と保護が長期にわたって不足しているために、留守児童たちは深刻な「愛情飢餓」現象に陥っている。

(c) 20%の父母は留守児童が1歳になる前に出稼ぎに出ており、そのうちの30%は留守児童が生後1〜3カ月のときに、出稼ぎに出て行っているため、相当数の留守児童は母親不在で十分な



授乳を受けておらずその成長発育に影響が出ている。

中国の地方における「留守児童」に、両親不在の発達上の悪影響が集中的に現れているということだ。

### 3 「留守児童」に関わる問題

本研究では、「留守児童」を必ずしも農民の子どもに限定しない。本研究では、農民以外の会社員・工場労働者であれ、両親が共に出稼ぎに出て、郷里に子どもだけが残されたとき、彼らを指すことばとして用いる。「留守児童」の数は急増し、中国の社会問題化している。「2008年に中国当局が発表した数字によると、片方または双方の親が出稼ぎをしている農村部の留守児童は全国で5,800万人に上り、うち14歳以下は4,000万人以上を占めている。これらの児童の8割は長期間親と離れて暮らすことで、様々な心理的な問題を抱えるようになっている」（張、2013）。「1歳8ヶ月の小夢ちゃん（女）が祖母の遺体と7日間共に過ごし、長沙市から戻った父親により発見された。小夢ちゃんは心身ともに深く傷ついた。…留守児童の問題は、単なる一つの家庭の問題ではなく、社会的問題だ」。人民日報の記事として報じた（人民網日本語版、2011）。「中国で、都市に出稼ぎに出た親と離れて農村で暮らす「留守児童」の増加が止まらず、社会問題化している。経済成長を支える出稼ぎ労働者（農民工）の生活支援制度の欠如が留守児童増加の背景にある。区都・南寧の西約250キロにある天等県巴竜村は人口約1,600人の半数が出稼ぎ中で、目につくのは高齢者や子供ばかりだ。村唯一の小学校を訪ねると、児童52人のうち47人が留守児童だった」（讀賣新聞、2013）。農民工に焦点が当てられ、一地域の問題として見過ごすことができない深刻な事態にあることを示している。

長期に亘る両親の不在は、「留守児童」にいろいろな負の影響を及ぼすことが指摘されてきた。例えば、①両親と別れて暮らし、たまに電話で話すだけで寂しい。祖父母・親族は食事等の世話だけで、心が通わない。②親・養育者の目が行き届かなく、成長期の子どもの素行に問題を生じやすい（喧嘩・犯罪等）、③学校の勉強の補習をしてくれる親がいなく、勉強嫌いになる（遅刻・無断欠席・退学等）、④健康に関する日常の配慮が足りない（栄養摂取・清潔保持・病予防等）、⑤通学中の安全が確保されない（誘拐・女兒暴行の多発）。こうした「留守児童」の置かれた劣悪な社会環境が、子どもの学歴・教養を低く抑え、結果的に出稼ぎを継続させ、「低い社会的地位の世襲化」を引き起こしかねないことが懸念されている（武吉、2008）。

### 4 延辺州で「留守児童」が生まれる背景

「留守児童」が生まれる背景にある延辺州・延吉市住民の「出稼ぎ」先は、初期には韓国であった。延吉市住民の生活は、農業中心の暮らしから現金収入を求めて隣国の工場や会社・企業で働く給与労働者の生活へと、大きく変化する。「留守児童」が生まれ増加する大きな要因として、中国に留まらず、日本、韓国など東アジア一帯の都市化・工業化の進展が深く関わっている。

中国の朝鮮族は、1949年中国共産党から少数民族の一つとして認定された。以来、中韓の国交は、1992年に至るまで断絶し、朝鮮族の韓国への往来も途絶えたままであった。一方、韓国では1988年にソウルオリンピックが開催され、急速な経済成長につながった。ソウル五輪には国交のない中国の選手も参加し、華やかな舞台・競技がテレビ中継された。めざましい韓国の経済成長は、中国の朝鮮族に大きな刺激となり、「豊かな国韓国」への強い憧憬の念を引き起こした（金、2013）。その後、1992年に中国と韓国の国交が樹立し、両国の関係は正常化した。経済交流も年々

盛んになってきた。しかし、朝鮮半島情勢の緊迫化に起因する韓国（米軍）の迎撃ミサイル配備に中国は反対する。「韓国企業に対する中国の経済報復が長期化し」、韓国の経済に大きな打撃を与えることが懸念されている（日本経済新聞、2017）。

金・浅野（2013）によれば、経済の面から見ると、1990年代以降、グローバリゼーションと市場経済化の中で、従来、中国東北地方は重工業の国有企業の大集積地だったが、そのほとんどが経営危機に追い込まれ、リストラが強力に推進された。外資の投資が沿海都市に集中したことで、東北地方は経済発展から取り残された。こうした中で、朝鮮族の生活も急速に不安定になった。市場経済の浸透と生活基盤の衰弱は、住民の海外への流出を招くことにつながった。

こうして「海外留学」や「出稼ぎ」を通じて、日本や韓国、アメリカ（サイパン島：縫製工場の労働者として）への朝鮮族の移動が急速に進んだ。つまり、1992年中韓国交樹立に伴う韓国への出稼ぎ、日本の留学生受け入れ拡大政策（1990年）に伴う日本への留学、そして外資で繁栄する中国沿海部大都市への就職・出稼ぎ等である。「出稼ぎ」に行くためにどのくらいの費用がかかるか公式の統計はない。延辺州の数人からの聞き取りでは、高額の準備金がかかる。韓国に出稼ぎをするためには7万元（日本円100万円くらい）の手続き費用がかかる。これは中国在住時の約7年分から10年分の収入にあたる。大きな現金収入が得られるとはいえ、出稼ぎをするには、準備金・支度金として莫大なお金がかかるということだ。そのため、出稼ぎ者は韓国に働き口を得た後、その返済のために、長期にわたって（3年から10年）滞在することになる（金・浅野、2013）。

中国東北部からの海外への出稼ぎの背景には、地域経済の疲弊と就業先の確保の困難、一次産業の衰弱がある。子どもの進学、家計の維持のために現金収入が得られる韓国への出稼ぎが1980年代後半から急速に進展する。金（2013）の韓国への出稼ぎ夫婦の聞き取り調査は、地元にあった発電所が廃止になり、それまで豊かであった地域が、一気に就労の場を失い、出稼ぎ労働者を増加させる一大要因だった。

## 5 本研究の目的

「留守児童」に関しては次のような問題点が指摘されてきた。1、親への愛着形成ができずに、親子の絆を薄く感じる。2、身体的心理的な発達が遅れている。3、親は子どものそばにいない代わりに金銭的補償をしようとする、したがって、子どもは贅沢な消費が当たり前になる。4、学力低下、学習意欲喪失、登校拒否、ゲーム中毒等が生じている。5、未成年者犯罪事件で、被害者は70%が「留守児童」である。6、人付き合いに困難を感じる。しかし一方で、心理的に安定して、苦勞している親に恩返ししたいと思っていて頑張っている子もいる。

今までの研究では、「留守児童」の問題点について多く取り上げられてきた。また、その問題点が親の不在や家庭環境と関連があることに重心を置いて研究されてきている。「留守児童」自身の環境への適応能力や自律性・自立性の発達には関しての研究は見当たらない。「留守児童」の否定的側面が指摘される一方で、苦勞をして出稼ぎをし、自分を育ててくれた親に感謝の気持ち、感情を持つ子どももいるであろう。また、親と離れ、親戚や祖父母に預けられて生活する子が、新たな「家族」に気をつかい、周囲に配慮するなど、精神的自立や社会性の発達を促す肯定的な側面も見られるのではないだろうか。「留守児童」が、親子関係をどのように受けとめるかによって、彼らの社会性、自立性の発達が異なると予想される。いじめの研究では（坂西、1999）、いじめ被害者は、苦痛な体験から人間関係を避けたり、体調不良を経験したり、長期にわたる否定的影響

響を受ける。しかし、他方で、他人の心情を思いやったり、精神的に強くなったり、積極的に自己を変える契機にしたりしていることも散見される。延辺朝鮮族自治州延吉市における「留守児童」の実態と彼らの内面的変化及び心理的発達過程を明らかにすることが本研究の目的である。

## 6 方法

本研究では、「留守児童」の生育過程を事例的に明らかにすることを目的にする。親と離れて暮らすことが持つ心理的影響を半構造化面接によって積極面と消極面の双方から明らかにする（研究1）。また、中国東北部延辺朝鮮族自治州において、両親の出稼ぎがどのような現実にあるかを質問紙調査に基づいて明らかにする（研究2）。

### 研究1 「留守児童」の成長過程

#### 目的

「留守児童」のライフヒストリーを、事例的に聞き取り調査して明らかにする。聞き取りでは次の3点に焦点を当てて整理する。①「留守児童」が生まれる過程と「家族」生活の変遷、②「留守児童」の環境変化への適応と心理・内面的世界、③「留守児童」が経験する精神的積極性。基本的には聞き取りに沿って内容を記述するが、語られたエピソードは上記3点を軸に分析するため、結果の小項目に沿って聞き取りの内容を整理した。

#### 方法

**調査対象者** 聞き取りの対象者は、大学院1年生の女性である。中国延辺州延吉市生まれで25歳である。日本に在住して5年になる。日本語の日常会話にはまったく支障がなく、流暢に会話ができる。文章の記述も不自由がなく、正確な日本語表現力を有している。朝鮮族であり、中国語と韓国語を自由に使いこなし、バイリンガルである。祖父母の代に韓国から中国に移住し、祖父母は現在も延辺自治区に居住している。両親は、韓国に出稼ぎに出ており、長年韓国に住んでいる。

**調査方法** 半構造化面接を行った。一回の聞き取りは40分前後（週1、2回）であり、計10回行った。聞き取る主な内容は、家庭状況、父母との関わり、親戚関係、就学前の様子、小学校・中学校・高校の様子、両親の「出稼ぎ」と留守家庭の様子、「留守児童」としての生活（養父母との関係・勉強・家事手伝い等々）、学校の教師との関係、高校進学・大学進学について、「出稼ぎ」先の父母との連絡・会話とした。聞き取りの過程で適宜質問を付加した。対面して自身の生育の過程について、エピソードを交えながら話してもらった。具体的には、子どもの頃に経験したことを、例えば、「日常の朝ご飯の準備・用意と朝食の様子」など話題を提示し、事前に記述してもらった。その後、それぞれの話題について、筆者がさらに細かく当時の様子を尋ね、それに具体的な人や場所や道具・遊具などを挙げて語ってもらい、説明してもらう形式を取った。場所は、筆者の研究室で、対面して行った。録音はせず、聞き取りをしながらPC（パーソナルコンピュータ）に入力し記録していった。なお、面接に当たっては、人権に配慮し、当人の話することができる範



囲で話してもらうこととした。中断を希望するときには、面接はいつでも中止できることを伝え、本人の了承を得た。さらに、聞き取り内容を研究として公表することの許可を得た。公表する場合は匿名とし、本人が特定されないようにすることを伝え、本人の承諾を得た。

調査の日時 聞き取り調査（面談）の実施は、2013年4月から12月までの期間で、10時40分～12時00分の間であった。既述したが、聞き取りに当たっては、差し支えない範囲で話していただくこと、面談をやめたいときは自由に中断することができる旨を説明し、了解を得て行った。聞き取り内容については、研究発表することの了解を得た。ただし、個人が特定できないよう配慮すると共に、関係者の匿名性も守り、不利益が生じないよう十分に配慮することを説明し、公表の承諾を得た。

## 結 果

### Ⅰ 「留守児童」が生まれる過程と「家族」生活の変遷

結果の記述に当たっては、基本的にはCさん自身の語りとして表し文章化した。そのため、聞き取り内容の記述には、一人称の「私」を用いた部分が多い。同時に部分的には、筆者が第三者としてCさんの語りを客観的に記述している。なお、Cさんの語りの内容と背景を理解するために補足の説明が必要ないしは有用であると判断した場合には、筆者の記述を加えた。

#### 1 延辺州・延吉市での生活の概要

Cさんの延辺州・延吉市での生活環境は、お母さんとお父さんの出稼ぎによって大きく変化している。なお、以下では、両親（母親・父親）は「お母さん」「お父さん」と、祖母（母親の母）は「おばあちゃん」と記述することにする。両親と一緒の暮らしは誕生から小学校中学年までと短期間であった。その後は祖母家族との生活、お母さんの兄弟（叔父）家族との生活、さらに帰国した両親との生活とCさんの生活形態はめまぐるしく変化している。彼女が特殊なケースではなく、「留守児童」の典型的な一事例と考えられる。ここでは、Cさんの心理・行動を生活環境の変化に沿って明らかにする。そこで、「同居家族」の変化に応じて便宜的に、Cさんの生活の変化を第1期から第5期に区分する。図2は、時期別にCさんが一緒に生活した家族を示したものである。

#### 2 Cさんの生活年表と生活の概要

Cさんの「家族」生活の変化と変遷の過程を、以下の6期に分けて整理する。この区分・整理によって、彼女の生活環境が大きく変わり、変化の連続であったことがわかる。一つの事例として、Ⅰ期からその時々のCさんの心境、心の動きを、Cさんへの聞き取りから素描し、親の出稼ぎが「留守児童」にどのように受けとめられているのかを明らかにする。

##### 1) 誕生から小学校3年生（10歳）まで（第1期）

お父さん・お母さん・Cさん、家族全員そろって暮らす。休みの日など、どこかに遊びに行った、楽しかった思い出、家族でどこかに行った思い出については、結果の最終部で記述する。

##### 2) 4年生から6年生まで（第2期）

「留守児童」の始まり お母さんが出発する当日の夜まで、「いなくなる」ことをあまり実感できなかった。駅でお母さんが電車に乗る瞬間に実感し、「私も電車に乗ってお母さんと一緒に韓国へ行きたい」気持ちになった。でも、いけないことがわかったから、すごく悲しくなって泣いてしまっ

た。お母さんが韓国へ行った翌日、学校が終わって家に帰ったら、お父さんだけが迎えてくれた。「お母さんはもうこの家にはいない」ことが悲しくなって、また泣いた。その一週間は毎日泣いた覚えがある。

女性の「出稼ぎ」ところで、男性に先立って何故女性が優先的に海外に出稼ぎに出るのだろうか。ここで簡単に触れておく。一般に、中国から韓国に出稼ぎに出る初期の頃には、男性よりも女性が先に出向くことが多いといわれた。Cさんのおじさんの家でも、最初にアメリカに出稼ぎに出たのは、女性であるおじさんの妻であった。それは「韓国など海外で募集する仕事に、女性向けの職種が多く、女性の方が働き口を見つけることが容易だからである」とCさんは語る。彼女のお母さんの場合も同様の事情で、父親が延吉市に残り、母親が先に韓国に職を求めた。

お母さんの見送り 雪が降っていた日（1996年11月5日：記憶が曖昧）の夜だった。お母さん

表1 Cさんの生活・暮らし・「家族」の変遷

時期	年齢・学校の区分	「家族」の変遷と家族
第1期	●ピンク部分・誕生～小学3年	→ お母さん・お父さん・Cさんの暮らし
第2期	□青部分・小学4～6年生	→ お父さん・Cさんの暮らし
第3期	●黄色の部分・中学1～3年生	→ 外祖母（おばあちゃん）・おじさん1・従妹1・Cさんの暮らし
第4期	●緑色の部分・高校1～2年生	→ おじさん2・従妹2・Cさんの暮らし
第5期	●ピンク部分・高校3年生	→ お母さん・お父さん・Cさんの暮らし
第6期	北京郊外の大学に進学→一人で寮生活	

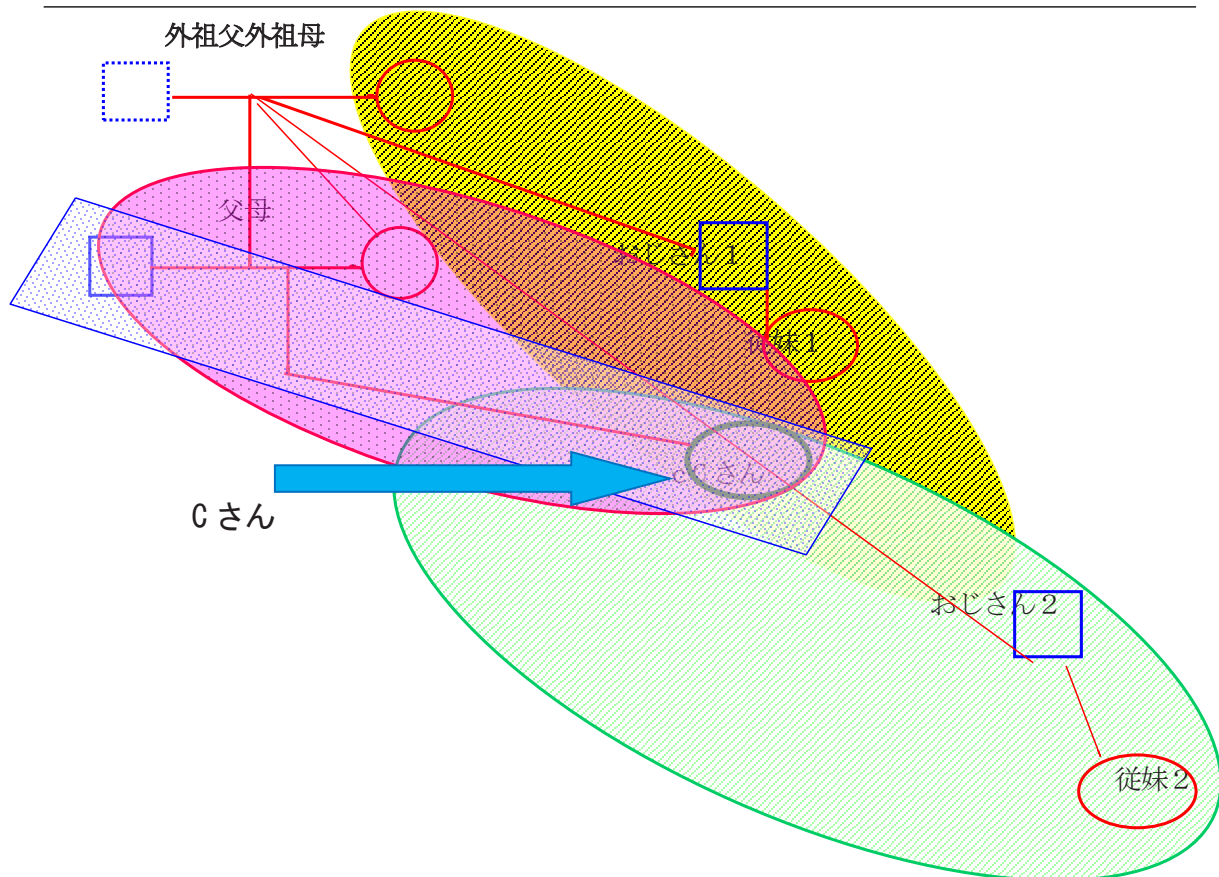


図2 Cさんの家族・生活を表す図



は、電車に乗り、遼寧省瀋陽の空港に向かった。空港に着き、韓国行きの飛行機に乗り換え、韓国に飛び立った。そのとき見送りには、家族と近い親戚縁者総出で行った。お父さんや親戚の人（お母さんのお兄さん、おじさんたち、従姉、お母さんの友達とその子どもたちなど）20人くらい一緒に行って見送りをした。そのときから、お母さんのいない、お父さんとCさん二人の生活が始まった。Cさんは「留守児童」になったのだ。お父さんとの二人きりの生活は6年生（1998年）まで続いた。

「出稼ぎ先」 お母さんが働く工場は、布などの製品を扱うところだった。工場が韓国のどの地域にあるのかはわからなかったが、「ソウルではなかったと思う」と彼女は記憶をたどる。お母さんは、出稼ぎに出た後は、Cさんが高校2年生になるまで中国の延吉市の家には一回も帰っていない。隣国とはいえ7年間もの長い年月、お母さんは一度も帰国せず、韓国で出稼ぎ生活を続けていたのである。Cさんもまたずっと「留守児童」の生活を送っていた。高校3年生になったときにお母さんが、出稼ぎから帰ってきた。その後、大学を卒業し、日本に留学するときにもずっと延吉市の家で母親と一緒に暮らしていた。Cさんが留学（2009年10月5日に延吉市を立ち6日に来日）して1年後2010年の冬頃にお母さんは再び韓国に出稼ぎに出た。現在も韓国で働いている。

3）中学校1年生から3年生：黄色部分（第3期） 外祖母（お母さんの母親・おばあちゃん）とおじさん（お母さんの兄弟で2番目のお兄さん）とその子ども（従姉・Cさんより6歳上）、そしてCさんの4人の新しい生活が始まった。お父さんは、このときから韓国に出稼ぎに行った（1998年の冬（記憶が曖昧、母親とは異なる場所）。仕事は、建築関係の会社だった。2年くらいはお父さんとお母さんは、別々の場所・職場でそれぞれ働き、離れて暮らしていた。2年ほど経った後で、ソウルで新しい職場を探してお父さんとお母さんが、一緒に暮らすようになった。ただ、職場はそれぞれ別のところだった。

Cさんが高校3年生のときに、ソウルで働いていたお父さんとお母さんが一緒に延吉市に帰ってきた。お父さんもお母さんと一緒に2010年に再びソウルに出稼ぎに出かけた。仕事は異なるが、同じ家に生活している。現在も二人でソウルで働いている。

4）高校1年生から高校2年生：緑の部分（第4期） お母さんの兄弟（おじさん2＝おじさん1の弟）とおじさん2の子ども（従姉でCさんより一歳上）も一緒に生活した。

5）高校3年生 お父さんとお母さんが韓国ソウルの出稼ぎから帰国し、7年ぶりに一緒に生活するようになった。

6）大学1年生から大学4年生（第5期） 北京から電車で約2時間半のところにある大学に進学し、大学寮に住んだ。夏休みや冬休みだけ延吉市の実家に帰って過ごした。Cさんが大学生のときは、お父さんとお母さんは、ずっと延吉市の家で暮らしていた。

7）日本への留学（第6期） 2009年10月5日に延吉空港から日本へ向かった。来日した後すぐに成田日本語学校に入学した。東京だと思って入学した。その頃は日本の事情を全く知らなかった。学校は、中国の仲介業者に紹介してもらった日本語学校である。仲介業者には、費用を払う。仲介費用は、仲介者が、お母さんの友人だったので半額でよかった。日本と中国の関係者で、仲介費用は折半する（約3万円）。他に授業料が必要になる（約70万円）。日本に来るのに総額で100万円近くかかる。

なぜそれほどにお金をかけてまで日本に留学するのか。それは、中国から近く、近親者が日本に居住していて、情報が得やすいこと、治安が良いこと等が挙げられる。また、日本語になじんでいたことも大きい。

### 3 朝鮮族家族の特徴

Cさんが小学4年生（母親が出稼ぎに出たとき）のときの父母の年齢は、何歳だったのでしょうか。お父さんは38歳、お母さんは35歳だった。お母さんが韓国に出稼ぎに出た後、数年間はお父さんとCさんの二人だけの生活が続く。さらに、お父さんが韓国に出稼ぎに出た後は、Cさんはお母さんの母親（「おばあちゃん」（外祖母）と呼ぶ）と一緒に生活することになる。母親が韓国に出稼ぎに行ったときの、祖母の年齢は69歳だった。祖母の夫は既に他界しており、女手一つで4人の子どもを育てた強さを持つ女性であった。祖母が再婚をせず、農業を主に家族の生活を守った背景には、漢民族に受け継がれている相互扶助の強い人間関係・大家族制の支えが大きな力になっていた。

**大家族** 大家族では一般に親密な関係があり、人間関係はよい。お正月や「老年日」（8月15日・老人の日）、4月にはお墓参り（4月7日頃、年によって日にちは異なる）など、あるいは親戚のおじさんの誕生日やおばさんの誕生日、結婚式などには、親戚が集まって（子どもなど）食事をして楽しく過ごす。以前は、お祝いやパーティは、誕生日を迎えるその人の家で開いていたが、今はほとんどの家庭が外食を利用して行っている。誕生日のパーティなども親戚だけでなく友だちや職場の仲間も集まって楽しむ。外食の場合円形テーブル（10人くらい）で、テーブルごとに子どものテーブル、職場のテーブル、家族のテーブルなどまとまりを作って用意する。これはどこの家庭でもやっている習慣であり、朝鮮族の文化である。祝う人に「お祝いの祝儀（お祝い金）を渡す」。この習慣は、主に誕生日と結婚式に限られる。これが、いわゆる「大家族」の人間関係である（大家族では、長幼の序を重視するなど厳しい面もある）。6、7人の兄弟がいるのが普通である。お母さんは、6人兄弟であった。祖父が早くに亡くなったので（30歳代で亡くなった）、片親家庭で育った。

**おばあちゃん（外祖母）** 外祖母のお母さん（Cさんの母親の母親の母親）は、生まれてすぐに亡くなった。お父さんの記憶ははっきりせず、父親との関わりや情緒的な関係は覚えていないとCさんは聞いている。おばあちゃん（お母さんのお母さん：以下おばあちゃんと記す）は、再婚せず、6人の子どもを農業をしながら育て上げた。お母さんが子どもの頃のことや、おばあちゃんの子育て経験や当時の生活については、おばあちゃんがよくCさんに話をしてくれた。山の上の方で農業をやっていたが、他にいろいろなところに農地があった。山の方にも平地の平らなところにもあった。息子とその妻、おじさんが一緒に農業を手伝って、作業をしていた。おばあちゃんは、長男、長女、次男、三男、Cさんのお母さん、おじいさんと先妻の間に生まれた子（長男の上の年齢）の6人の子どもと暮らしていた。子どもたちは皆仲がよかった。子どもが独立した後、二番目の次男（おじさん1）とずっと同居していた。Cさんのお母さんとお父さんが韓国に出稼ぎに出るようになった後、Cさんは、おばあちゃん・おじさん1と一緒に生活するようになる。おばあちゃんは、作った野菜や収穫物を売って生活の糧を得ていた。おじさん1が、当時農業以外の収入（近くの工場に勤めていた：当時Cさんは小さくよく覚えていない）を得ておばあちゃんの生活を助けていた。

**叔母・伯父の出稼ぎ** Cさんと同居する前、80年代後半から90年頃に韓国におじさん（おじさん1）が出稼ぎに出るようになり、その収入で家を新しく建て替えた。その後、家にはおばあちゃんとおじさん1の奥さんと子ども（Cさんの従姉に当たる一人子）だけが残ることになった。男手がなくなり、農作業を一人でやるのが困難になり、農作業を減らした。この頃は韓国の景気がよく、短期間の出稼ぎで（1年半くらい）多くの収入が得られた。その頃おばあちゃん健康状態はよくなく、おじさん1に帰ってくるように言っていた。おばあちゃんは心臓が少し弱く、薬を飲んでい

た。おじさん1は、1年半くらいで出稼ぎから帰ってきた。その頃おばあちゃんは三男のところで一緒に生活するようになり、おじさんの子どもの世話をしたりして過ごしていた。おじさん1は、奥さんと子どもの三人での生活を送っていた。この頃にCさんはまだ小学1年生であり、お父さんとお母さんと三人で暮らしていた。

親戚の中で母親である女性が最初に海外に出稼ぎに出たのは、三男の奥さんが初めてだった。それも遠いアメリカへの出稼ぎだった。子どもは小学校2年生だった。おかあさんが出稼ぎに出ることで、家の仕事をやりくりするのが大変になり、おばあちゃんが三男の家族と同居し子育てを手伝っていた。この従姉は、大きくなってから（20歳の頃）アメリカにいるお母さんのところに行って出稼ぎをするようになった。1年か2年の短期間。お母さんはそのまま出稼ぎを続け、今はカンボジア（Cさんの記憶が曖昧）で働いている。ずっと海外で働いていて、3年に一回くらい約一ヶ月一時帰国する。

## II 「留守児童」の環境変化への適応と心理・内面的世界

### 1 延吉市での学校生活と環境への適応

Cさんが育つ過程では、家族みんなで一緒に暮らした時期と「留守児童」として生活する時期が混在している。ここでは、保育園の時期から高校卒業の時期までを区分して、Cさんが感じていたこと考えていたことを整理し、まとめる。以下では、できるだけCさん自らのことばで記述し、必要に応じて筆者の説明を加えた。

保育園の生活 保育園には、通っていない。

幼稚園の生活 4歳で幼稚園に入った。町の小さい幼稚園で、先生が3～4人くらい、園児が20人くらいいた。音楽、絵描き、言語、算数などを教えてもらう。昼ご飯を食べて、昼寝の時間がある。起きたら、おやつを食べる時間になる。夕方4時ごろ親が迎えに来る。

遊びをするとともに、午前中には、勉強も教える。基礎的、基本的な言葉（ハングルの書き言葉、話し言葉など、中国語も同様に教える）、絵本のような教科書があった。算数（「1+1は？」などと子どもに尋ねたり、数の数え方、手を使って数えたり）も教えてくれた。

この頃にはまだ留守児童の子どもはいなかった。留守児童が社会的に生まれてきたのが1990年代から。朝8時頃から幼稚園に行き、夕方4時30分頃まで園にいた。基本的には親が迎えに来るまでで、午後何時までと時間がきちんと決まっているわけではない。だいたい4時から5時頃までだった。お昼をたべてから少し遊び、1、2時間昼寝をする。おやつを食べ、遊んで、親が迎えに来ると家に帰る。普段は歌を歌ったり、絵を描いたりした。1年弱しか通わなかった。別なところに引っ越しをしたからだ。引っ越しをしてからは、幼稚園には行かなかった。就学前学校に通った。朝鮮語、音楽、歌を歌ったりした。幼稚園に行かずに小学校に入る子どもは、何も教わっていないため、学校に入ってから勉強について行くのが厳しい。幼稚園の中の砂場や遊具・滑り台などで遊んだ。自由遊びは楽しかった。

プレスクールの生活 幼稚園が終わったら、学校に入る1年前くらいに準備学校（6歳から7歳）に入った。この学校は、小学校の付属学校（小学校の中にある）として設置されていた。朝8時頃に登校し夕方5時頃まではそこで過ごした。基本的には小学校と同じで、授業で教えてもらった（いろいろな教科が用意されていた）。1年生とほぼ同じ内容を勉強したので、「楽」といえば楽だった。バスで通い、お母さんかお父さんが毎日学校まで連れて行ってくれ、帰りは迎えにきてくれた。お昼は給食があり、食堂からお昼ご飯を子どもが運んで、先生が分けてくれた。昼ご飯が



終わると子どもたちの当番が掃除をし、他の子どもは遊んですごした。その後は、午後の勉強になった。教室内にピアノがあり、先生が弾いてみんなで歌う授業もあった。

小学校の生活 小学校は漢民族と朝鮮族の学校に分けている。基本的に朝鮮族の子は朝鮮族の小学校に進学し、漢民族は漢民族の学校に進学する。それでも、漢民族の学校に進学する朝鮮族の子もいるし、朝鮮族の学校に進学する漢民族の子もいる。学習内容はほぼ一緒だが、朝鮮族の学校では朝鮮語と漢語を勉強する。一学年7から8クラスあった。一クラスの人数は、40から50人くらいで、大きいクラスになると60人くらいのクラスがあった。担任の先生は一人で、算数と国語を教え、他の教科は教科担任の先生が教えた。学校には校長先生、副校長、教務主任がいて、保健室の養護教諭がいた。3年生までは、午後3時から3時半頃に下校した。4年生を過ぎると学校で過ごす時間は長くなり、補充授業（担任の先生が例えば、数学の問題を出し、それが解けないと「帰れないよ」「早く終わった人からいいよ」等の指示をする）などがあった。サークルがあり、算数、美術、音楽、英語、などで、担任の先生が、かなり自由に教えてくれた。年度の始まりは9月（9月、10月、11月、12月が1学期）で、学期の終わりは6月だった。7月・8月は夏休み、1月から2月いっぱい冬休みになるのが一般的だった。3月から2学期が始まる。3月、4月、5月、6月が2学期だった。

夏休みはおばあちゃんのところに行き、ずっと泊まってすごした。実家の近所に同じ年頃の友だちがいたので、家の近辺で遊んだり、山で遊んだりした。親戚の従姉妹なども遊びに来て、川や山など自然の中でよく遊んだ。今は都市化されて自然も少なくなり、遊ぶ場所も自然の中ではなく、家の中での遊びやゲームなどコンピュータを使かった遊びが多い。魚を捕ったり、蛙を捕まえて手に乗せたりして遊んだ。捕まえた蛙を焼いて食べる子もたまにはいた（「おいしい」と聞いた）。生きた蛇は見たことがない。もっと奥の山の中でないと蛇は見られなかった。

冬は、雪が降るので、ちょっと堅いビニールを持ってき、それをお尻の下に敷いて山の上から滑って降りて楽しんだ。「おねえさん」たちとよく遊び、とても楽しかった。木で作った四角の板（子どもが一人座れる大きさで、板の下にスケートの歯・金属を取りつける）を使って凍った川や池で滑って遊んだ。お正月には、花火を上げた。爆竹も楽しんだ。お正月は外でみんなで遊んだ。

小学校では運動会があった。前もって運動会の練習をした。種目によって、出場する選手を選んだ。1年生のときには、Cさんは4人で組んだりレーに出て走った。玉入れもおもしろかった。ボールを投げてみんなでバケツに入れ、たくさん入れた組が勝つゲームだった。障害物競争もあった。いろいろな障害物をうまく「すり抜ける（ネットや机をくぐったりする）」競争に出た。なかなかうまくいかなかったのでよく覚えている。髪が引っかけりビリだった。運動会に出たのはこれが最初で最後だった。そのとき自分は運動に向いていないと思った。特に短距離は向いていないと思った。

中学校に入って長距離を走ったが、長距離の方が自分には合っていると思った。運動会は、年一回くらいあった。全員参加ではなく、参加したい人が参加する。他の子どもは見て、応援する。運動会にはお父さんとお母さんをはじめ、家族が参加する。おじさんやお婆さんは、参加する家庭もあれば、参加しない家庭もあった。お昼はそれぞれの家族で一緒に食べる子も、友だちと一緒に食べる子もいて、自由だった。

運動会が終わると、街のレストランや食堂にクラスの先生と一緒にいき、ご飯を食べて話したりして楽しんだ。友だちと遊べるので楽しかったが、夜遅くなるため眠くなったり疲れたりした。親は親で、子どもたちとは別に、レストランや食堂で飲んだり食べたりして楽しんでいた。子ども

たちは、食事と懇親が終わった後、だれかの家に集まって話したり遊んだりして過ごした。家に帰るときには、お父さんやお母さんが迎えにきてくれて一緒に帰宅した。

小学校では、各学年で公園や施設に行く遠足があった。子どもの日など、年に一回くらい校外学習の機会があった。修学旅行はなかった。革命記念館や博物館などへは毎年見学に行った。学校に集まって歩いて行った（学校から遠くなかったのだ）。映画なども学区でみんなで見に行った。革命的な映画や戦争に関する映画（日露戦争や中日戦争の映画）を見た。これは、子どもの正義感を養うための教育の一環だったと思う。鑑賞後に感想文を書いたりした。感想文を先生が選んで、発表し説明をしてくれた。子どもたち同士が「意見を発表し合うこと」はほとんどなかった。

中学校の生活 中学校も朝鮮族の学校と漢民族の学校に分ける。1学年クラスは12クラスあった。一クラス45人くらいだった。男女同数くらいだった。担任が一人。数学の先生が担任だった。担任は教科の専門の先生だ。授業ごとに先生が替わる。理科や体育は実験室や体育館に移動する。中学校は荒れていた。自分のクラスが一番荒れていた。学校に来ない子もいたし、校外の「問題のある」子や年上の「不良少年」とつきあう子もいた。担任の先生は、責任感のある先生で、そんな子を探しに行ったり、親と相談したり、子どもを学校に連れ戻したりするよい先生だった。

先生とはよく話をした。女性の先生で、Cさんにはとてもよくしてくれ、お弁当などもよく買ってくれたという。中学校では、入学して1週間頃に「軍事教練」があった。そのとき何か実際に教練をする前に、つまり何もしないうちに、立っているだけでCさんは倒れた。その頃Cさんはずっと体調が悪かった（この時期Cさんにはいろいろなことがあって心理的な負担が大きかった）。このときCさんはおばあちゃんのところで暮らしていた。お母さんもお父さんも韓国に出稼ぎに行っていて、両親は不在だった。

先生は、「教練はいいから」と、Cさんを教室で休ませてくれた。親の出稼ぎのことは担任は知っていたし、おばあちゃんと暮らしていることも知っていた。おじさんが、学校の「親会議」に参加していたので、家庭の事情を先生に話をしていたからだ。

高校への進学 高校進学の進路については、Cさんは誰に相談していたのだろうか。「こんな学校に行きたいけど、どうですか？」など、電話でお母さんとお父さんに相談したという。先生とも友だちとも相談した。高校は、レベル分けされていて、ランクが上になるほど入学が難しくなる。高校入学のための共通した試験があり、その点数の善し悪しで進学できる高校がきまる（高校別に入学できる点数が決まっている。お金を入学時に特別に納めて、入学することもできる）。進学に関して困ることはなかった。

小学校からの友だちもいたし、中学校で新しく知った友だちもいて、中学校生活は楽しく、特に3年生のときは楽しかった。高校進学する生徒25人くらいで集まって勉強したので、家族のような雰囲気でもよかったし、楽しかった。その前は、クラスに問題を持つ子どもがいて、とくにCさんのクラスは乱暴な子がいたのでたいへんだった。中学校では部活動があり、書道と美術の部活に参加していた。サークルのようなもので、5、6人集めて先生が指導してくれた。陸上、サッカーなどもあった。男女共学の学校。いくつかの小学校から集まって中学校ができていた。一人孤立している子（女の子）がいたが、たまにお昼など誘って一緒に食べたりした。5時6時くらいまで学校にいたが、3年生のときは補習があったので9時頃まで学校にいた。夏休みや冬休みには、担任の先生の家に集まって（勉強したい生徒が集まって勉強特に数学を教えてもらったり、問題集をやったりした。ただしお金を200元くらい払う）。寂しいことは寂しかったが、「留守児童」にも慣れてきたので、最初の頃よりはきつくはなかった。

育てられた自立心 どんな状況になっても、自分ですぐのその場面に慣れ、自分でやっていく力がついたと思う。自分でできることは、自分でやろうと思うようになった。特に留学すると、知っている人がいなく、何でも自分でやらなければならないので。大学は、自宅を離れ遠かったので自分で何でもやらなければならない。この力は、お父さんとお母さんが出稼ぎに行き、普段から家にいないので育てられたと感じている。小学校や中学校の頃から、自分で何でもやらなければならないから身についてきたと思う。人間関係では、相手と気が合っても合わなくても、合わせてやってきた。従姉妹でも、自分から相手に合わせるようにして、「もめないよう」調節してやってきた。「喧嘩はしない」とCさんは言う。

高校の生活 朝鮮族の学校と漢民族の学校に分けられていて、1学年11クラスくらいある学校だった。朝鮮族の高校であり、授業はすべてハングルで行う。高校卒業までずっとハングルで過ごした。日常語もハングルで過ごす。中国語は、学校で習ったり周囲の人から日常的に学んだりすることで習得する（普段はテレビや買い物など近所の人と接する中で）。3年生のときは、大学受験をするために集中的に受験勉強をする時期にある。2年生までに教科書は終わり、3年生は受験に向けた勉強になる。共通テストがあり、全国一斉に同じ日に実施される。最初に入りたい大学を第1希望、第2希望として申告する。共通テストの点数によって、大学が認める点数以上であれば入学できる。1年目で第2希望の大学に入学した。第1希望の大学は5点足りなかった。進学先については、お父さんとお母さんに相談した。3年生のときにはお母さんもお父さんも中国（延吉市）に帰国し、家族で一緒に生活していた。

長く一緒に住んでいなかった後、また家族で再会し一緒に住むときの気持ちは、どのようなものであったのだろうか。「お母さん・お父さんとの間に距離感があり」、「すごく遠慮したし、甘えたりはしなかった」と言う。（Cさんが）小学4年生のときのお母さんと、高校3年で再会したときのお母さんでは、イメージが違う気がした。「たぶんお母さんもびっくりしたと思う」とCさんは言う。小さなときずっと小さかったCさんが、お母さんよりも大きくなっているのだから。電話や手紙でやりとりしていて精神的にはつながっていても、実際に会ったときの気持ちには「違い（違和感）」がある。対面したときには一種の恥ずかしさもあり、話もあまりしない。親しく話す話題がとっさには出てこない。最初はあまり話さなかった。一緒に生活するうちに、だんだん親しくなり、相談したり、あまり緊張せずに話したりするようになり、自分の要求やしてほしいことなども次第に話せるようになってきた。緊張はしなかったが、距離感があった。ずっと会っていなかったから当初は違和感を感じ、「これほんとにお母さん」といった思いがあったという。

大学への進学 延辺州には、延辺大学と延辺科学技術大学などがある（学生総数2万人くらいの中で朝鮮族の学生は30人くらい）。大学では、中国語を使わないと通用しないので、大学で中国語が随分うまくなった、とCさんは語る

## 2 「留守児童」の家庭の現実

### 1. 母親が出稼ぎを始める前のある一日—小学3年生の1日—

母親が「出稼ぎ」に出る前のCさんの日常を理解するために、彼女のある一日を本人のこともを用いてまとめた。なお適宜筆者の説明を加えた。

起床と朝食 6時半、朝起きたら母親が朝ごはんを作っていて、父親はまだ寝ていた。Cさんはまず顔を洗って、歯磨きをした。しばらくして、父親も起きて庭で飼っているひよこ（一羽）にエサをやる。その後、父親が部屋に戻ってきて、丸い折りたたみ型の食卓を開いてテーブルの準備



をする。用意ができれば、私(Cさん)はスプーンや箸を置く。できあがったお料理を母親から次々と渡されて、運んで食卓の上に並べた。食卓の上には味噌汁、ごはん、キムチ、肉と野菜炒め、お餅などがある。これが朝鮮族の一般家庭の朝の食卓である。

会話 三人で朝ごはんを食べているとき、Cさんは「学校で勧められた作文集を買わなきゃいけない、お金が必要です。」と言い出す。お父さんから「何でいつも朝ご飯のとき言うの？ 次からは前日の夜に言ってほしい。」といわれた。なぜか夜は言いたくない気持ちであった。たぶん申し訳ないという気持ちがあったので言えなかったのかもしれない。なぜなら、ほぼ毎日学校からの徴収金があったからだ。本を薦めたり、雑誌をクラス全員が購読したほうがいいといわれたりした。また、授業の材料費や、活動の費用などがあった。父親のことばに私は「はい、わかりました」と答えて母親を見た。母親は別に「かまわない」といった表情であった。

バス通学 7時半、食事が終わって、母親が作ってくれたお弁当とお金をもらい、バスで学校へ行く(お弁当：白いご飯と、朝作った肉野菜炒め、漬物、などが入っている)。スクールバスはなく、一般の市営バスを利用して通学した。朝晩の通勤時間帯(朝7時から8時頃、夜5時から6時頃)は、一般の会社員などの通勤にも利用されるため、バスは混むことが多かった。交通の渋滞は、道路が広がったため全くなかった。当時は車がそれほど普及していなかったことも一因であった。現在は車も多くなり、交通事情は一変している。

夜7時頃になると終バスになり、その後は運行がなくなった。バスが利用できないときは、タクシーを利用した。Cさんが学校へ行ったあと、母親も父親も出勤する。二人とも職場が近かったので主に自転車通勤をし、時にはバスを利用した。母は食器製造会社に勤めていて、父親は食品(ビール)会社に勤めていた。

バスの中で同じクラスの友達に会った。一緒に楽しくおしゃべりをしながら学校へ向かう。家から学校まで、バスで15分くらいかかる。歩くと30分くらいの距離にある学校であった。

授業と先生 8時から授業が始まる。授業の前に、先生が宿題を検査して、宿題を「しなかった」生徒には罰を与える。叱ったり、もっとたくさんの宿題を出したり、教室の外へ出されたりする。授業では、先生は一方的に教えて、時々質問したりする。手を挙げる生徒がいないと、先生が指名して質問する。質問して正解を答えなかった生徒は叱られて、先生はほかに知っている生徒はいないか問う。だから、私はわからない問題であれば、手を挙げないし、指名されることを怖がっていた。一つの質問に必ず一つの答えがあるとは言えない。また、一つの答えしかないと言っても間違うと叱ることはよくないと思った。このようなことを続けると、子どもたちの想像力や創造力の発達、積極的な学びの態度はだんだん劣っていく(萎縮する)のではないかと考えた。

先生が、最後に宿題を出して、授業は終わる。わからないことがある生徒は先生のところへ行っても聞く。先生は、聞きに来た生徒には丁寧に教えてくれたが、(Cさんは)怖くて聞きに行くことはほとんどなかった。それは、延びでは、教師は、子どもにとってとても権威のある存在で、近寄りたがたい雰囲気を持っていたからだ。わからないことがあると、Cさんは友達に教えてもらった。

休み時間 普段は、午前中に45分授業が4時間あり、授業と授業の間に10分間の休み時間があった。10分間の休みの時間には運動場に出て遊んだ。クラスメートとゴム紐遊びとか、チェギ(テニスボールくらいの大きさで、お米の入った鞠。Cさんはよく使い古しの靴下で作った)を蹴る遊びなどをする。時々売店にいったアイスクリームを買って食べたりした。

昼休みは長く(1時間半くらい)、3、4人のクラスメートと一緒に教室でお弁当を食べる。仲のよい友だちで集まって机を丸く並べたり、隣同士で並んだりして一緒に食べた。どこで食べるか

は、子どもの自由であった。担任の先生はお昼時間には、教室にはいなかった。お互いのおかずもちよっともらって食べたり、おしゃべりしたりしながら楽しく食べた。お昼の時間は、友だちとの交流の場であり、気分転換できる気楽な時間であった。

放課後と帰宅 4時、学校が終わって家に帰る時間だ。登校のときと同じで、友だちとバスで帰る。一緒に帰る友だちは、家が近所同士でいつも一緒であった。家に帰っても、いつも両親はまだ帰っていない。家には、Cさんがいるだけだった。お腹がすいたら、家にあるお菓子などを自由に食べて過ごした。一人でテレビを見たり、宿題をしたり、本を読んだりして過ごした。

また、友だちと外で遊んだり、自分の家に連れてきたり、友だちの家に行ったりした。友だちは同じ小学校の違うクラスの子もいたし、他にも漢民族の友だちや年下の友だちもいた。みんな女の子であった。家の近所は全部一戸建て住宅であった。隣との関係もよく、親しい付き合いがあった。家で何かおいしいものを作ると、近所の人やお隣さんたちによくあげていた。

夕食 6時頃になると、親が帰ってくる。両親が帰宅すると、三人で一緒にご飯を食べた。夕ご飯の用意は朝ごはんのときとほぼ一緒（同じ）であった。お母さんが料理し、お父さんとCさんが食卓に料理を運んだ。たまたま母親の会社で飲み会があつて帰宅が遅くなると、父親が料理し、二人でご飯を食べた。両親とも遅くなる日は、Cさん一人でご飯を食べていた。一人で食べる食卓は寂しかった反面、あり合わせの材料で、普段のお母さんの料理を「見よう見まねで」、自分で「料理する」ことは楽しかったという。一人でごはんを食べるときには、いつも自分で野菜いためを作ったりチジミを作ったりした。もちろん、作るのは「すごく」下手だったが、まずくはなかったという。作った料理は、お母さんやお父さんの分も残しておいた。帰ってきて味見はしていたが、どのくらい食べたかははっきり記憶していない。お母さんは、Cさんの料理をみると、いつも「危ないじゃない」と心配そうに声をかけていたそう。

6時半頃に夕食を食べることが多かった。夏は夜7時頃までは明るく、朝は4時頃から空が白んできた。冬は、夕方4時半頃から暗くなり始め、朝方明るくなるのは6時半頃からである。夕食はテレビを見ながら食べていて、学校であったこととか、親の会社での出来事とか話し合ったりした。また、私（Cさん）は父親とアニメと一緒に見ながら、話し合ったりした。母親はアニメよりドラマの方が好きだった。アニメ番組は早い時間帯にあり、アニメ番組が放送されることが多かった。ドラマは三人で見ることが多かった。

団欒 夕食が終わったら、私（Cさん）は宿題を始め、数学の宿題は母親から教えてもらい、朝鮮語、漢語は父親が教えてくれた。漢字の宿題が特に多くて、父親が私のことを可哀そうだと思って、手伝ってくれることもあった。例えば、一つの漢字を50回ずつ書く宿題では、出される漢字は1、2個ではなく10個以上も出された。もちろん漢字以外の主題もたくさん出され、すべてをこなすには膨大な時間が必要だった。Cさんが疲れて眠くなると、お父さんが「漢字の書き取り練習」を臨時に助けてくれるというわけだ。

10時、宿題が終わったら、翌日の準備（教科書、鉛筆などをそろえる）をし、入浴・歯磨きをして布団に入る。宿題が終わらないときは、翌朝早くに起きて、さっと宿題をして、忙しく学校に行く。

## 2. 「留守児童」の心理・内面的世界

母親・父親が「出稼ぎ」に出る前後のCさんの心理・内面を理解するために、彼女のことばを用いてまとめた。なお適宜筆者の説明を加えた。

家計の窮状を察する お母さんが勤めていた会社が（大きな会社だった）、大きな火事になり倒産してしまった。そのため働く職場がなくなり、収入が減ってしまった。お父さんも働いていたが、その頃に（火事になる少し前に）会社を辞めていたので、余計に収入面では厳しくなった。その時期には延辺州で職を探すより、韓国の方が働き口が多く、収入も多かった。周りにも出稼ぎに出ていた人が多く（知り合いやお婆さんの夫（おじさん）も出稼ぎに出ている、出稼ぎに出やすい環境にあった）。働き口がないと、日々の現金収入がなくなるので、貯金をくずして食べて行かざるを得なく、どうしても仕事を探さなければならない事情にあった。小学生ではあっても、家計の事情は、その場の雰囲気から察していた。また、会社の火事の事情もわかっていたので、出稼ぎに行かなければならないことについてある程度は理解していた。お母さんやお父さんが困っていることは、子どもながらにわかっていた。Cさんに直接「家計が苦しい」という話はしなかったが、お父さんとお母さんが話し合っていることは脇で聞いていた。

親に心配させない お母さんとお父さんとは、電話と手紙でやりとりをしていた。当時インターネットはまだ発達していなく、一般の電話を使っていた。頻度は、一週間に一回くらいであった。内容は、その日の様子や学校でのできごとだった。困ったことなどは、電話では話さなかった。話すと親が心配すると思い、それは口にしなかった。いいことばかりを親との電話では話した。困りごとや相談事は、身近にいるおじさんやお婆さん、従姉などに話し、相談に乗ってもらった。困ったことがあっても、周りの人にもそれほど話さなかった。一人では解決できず、どうしようもないことがあれば、そのことだけは相談したが、他のほとんどのことは誰にも相談せず、自分で解決しようと思い、自分でやっていた。親に「寂しい」などとは言わなかった。寂しい気持ちは、電話では絶対に話さなかった。

周りへの気づかい 手紙では、自分の寂しい気持ちについては書かないようにしていた、家に帰ってもおとうさんやおかあさんがいないこと、住んでいる家が自分の家ではなくお婆さんの家だったので、周りの空気を読んで気をつかった。でも、お婆あちゃんの家では、気もつかわずのびのび過ごしていた（お婆あちゃん・おじさん1人・従姉1・Cさん：お婆さんはCさんが中学1年生のとき韓国へ出稼ぎに行った）。お婆あちゃんとは何でも話ができた。

おじさんの家に住んでいるときなど、奥さんとは直接の血のつながりがないので、特に気がつかった。「自分のことは自分でやりなさい」、「もう子どもじゃないし」、など厳しいことも言われた。生活費は、お母さんがお婆あちゃんに送り、お婆あちゃんからCさんはおこづかいや学費をもらっていた。Cさんが友だち（今日本で一緒に住んでいる）から聞いた「留守児童」のケースでは、金銭事情はとても厳しい。友だちの従姉妹が親戚の家に預けられて住んでいたときには、親からの養育費・生活費の仕送りがなかった。しかし、友だちの従姉妹も生活をするには、経費は必要であり、家の人にお願ひせざるを得なく、とても辛い思いをした。親は10年ぐらい「出稼ぎ」をしてから、中国に帰国したときにまとめて親戚に払えばよいと考えていたらしい。

Cさんが送る手紙に対して、お母さんからは、「あなた（Cさん）のために頑張っているのよ」「この家のためにがんばっているのよ」など、（Cさんを）優しく励ますことばが書かれていた。お婆あちゃんにも、お母さんは手紙を書いていた。時々洋服や本、CD（Cさんのリクエストしたもの）、プレーヤーなどを送ってくれた。お母さん自身の写真を送ってくれたりもし、Cさんも自分の写真を撮ってお母さんやお父さんに送った。韓国のお母さんやお父さんのところに行ったことは一回もなかった。食事などはお婆さんが作ってくれたが、洗濯は自分でやった。お手伝いも自分から進んでした。部屋の掃除、食器洗いはお姉さんと一緒にやっていた。お姉さんは、とてもきれい好



きで、掃除などはきっちりとやらないと気が済まない性格だった。Cさんは、周囲の人への気づかいと、できることは自分でやることが、親戚とはいえ「他人」である人と一緒に暮らす上では欠かせないことであると考えている。これは、両親と離れていくつかの親戚の元で生活する中で、誰に言われるともなくCさんが身につけてきたことだという。

### Ⅲ 「留守児童」が経験する精神的積極性

#### 1 母親が出稼ぎを始めたときのある一日：お父さんとの生活

母親が「出稼ぎ」に出た後のCさんの心理・内面を理解するために、彼女のことばを用いてまとめた。なお適宜筆者の説明を加えた。

小学校4年生のある1日 朝6時半、父親が起きて、朝ごはんを作ってくれる。味噌汁、キムチ、炒め物など、料理の種類・品が大きく変わることはない。配膳の準備などは、ときどきCさんも手伝う。朝ごはんを食べて、学校へ行く、これがお母さんのいないCさんとお父さんの朝のスタートだった。

午後4時、学校が終わって家に帰る。Cさんは、一人で本を読みながら、父親が帰ってくるのを待つ。父親が帰宅してから、一緒に出かけて外食する。母親が家にいなくなってから、外食が増えたという。外食が済んで家に帰ってからは、宿題をしたり、テストの準備をしたりした。たまには、父親が宿題やテストの準備を手伝ってくれた。例えば、暗記の試験があるときは、「ちゃんと暗記できたかどうか」調べてくれたりした。宿題が終わると、テレビを見ながら布団に入る。

楽しかったこと Cさんに、楽しかった思い出を一つ挙げてもらった。Cさんは次のように語っている。「子どもの日（6月1日）に家族3人で公園へ行きました。小学校2年生のときでした。お母さんが作ったお弁当（のり巻きやチキン、カルビ）と沢山のお菓子を買っていきました。いろんな乗り物に乗って遊んだ。お母さんは乗り物が「ダメ」なので、お父さんと一緒に乗った。お昼にはお弁当やお菓子を食べた。午後もうちょっと遊んでから、家に帰る。家で夕飯を食べながら昼間公園であったこと、一日楽しかったことを話しました。「三人でどこか出かけるのは少なかったもので、印象に残っています」とCさんは振り返る。

嬉しかったこと 印象に残っている嬉しかったことは何か、尋ねた。小学校1年生のとき、最初の期末テストで、優等賞をもらって家族でお祝いをしました。お母さんがおいしいものを作って、お父さんは私が好きなお菓子をたくさん買ってきました。「これからもがんばって優等賞をもらってね」と言って励ましてくれました。これが一番嬉しかったことです。「楽しかった思い出」「嬉しかった思い出」には、お母さん・お父さんのことばかけ、「子どもを思う親の心と気づかい」が強く残っていて、それらがCさんの心に深く広く染み渡り、彼女の支えになっているという。

#### 2 親の「出稼ぎ」で生じた積極的なこと

母親が「出稼ぎ」に出た後、Cさん感じる「積極的な面」を理解するために、彼女のことばを用いてまとめた。なお適宜筆者の説明を加えた。

##### 1. 「自立心」の発達

生活面 朝ご飯も夕飯も「おばあちゃん」が作ってくれた。おばあちゃんは、朝はCさんが寝ているうちに早く起きてご飯を作ってくれる。おばあちゃんは、ご飯の準備をしてくれた。チゲ、味噌汁、おかず、野菜炒め、キムチ、そのほかニンニクなど家庭料理を作ってくれた。

床下にトンネルがあり（おんどろ）、石炭をトンネルの口の所に入れて燃やし、その「熱気」を

トンネルの奥まで入れる。トンネルを暖かい空気が回って家の中が暖まってくる。これは石炭を運ぶなど、力がある作業なのでおじさんがやってくれた。一緒に住み始めた頃からCさんも手伝った。夏休みや冬休みにはおばあちゃんの家遊びに1月くらい来ていた。おばさんの子ども（従姉）や他の親戚の従姉妹、近所の友だちなどがいるので寂しくはなく、楽しく過ごすことができた。家では長い休みのときには、お母さん・お父さんがいないから一人で寂しいし、やることがないので、おばあちゃんの家で過ごすのは嬉しかった。

おばあちゃんの家には、おじさんの妻、おばさんがいた。今考えると、おばさんがいるときは、普段はおばさんが食事を作ってくれていた。毎日食事をきちんと作らなければならなかったから、大変だったと思う。周りの子も、長い休みになると親が出稼ぎしていなくなるので、私（Cさん）と同じようにおばあちゃんの家に行って過ごすことが多かった。おばさんが韓国に「出稼ぎ」に行ってから、おばあちゃんが食事を作るようになった。

おばさんが食事を作ってくれるときには、何も気にしていなかった。でもおばあちゃんが食事を作るようになってからは、気をつかった。祖母は年を取っていたので、ご飯を作るときに手伝うようになった。ご飯とおかずを運び、お箸とスプーンを並べて用意した。おばあちゃんは70歳代中頃で心臓が悪く、薬を飲んでいたので、「たいへんだな」と思っていた。「これ運んで」「スプーンと箸を並べて」など時々おばあちゃんが声をかけてくれた。自分で食事の後かたづけをしたり、食器を洗ったりした。

家の掃除 部屋の掃除もするようになった。祖母と一緒に住むようになってから、何もやらないというわけにもいかず、それでは気まずいので、少し気をつかうようになった。夏休みなどに遊びに来ていた頃には、それほど気はつかわず掃除はしなかった。一緒に住むようになってから、床を雑巾で拭いて掃除をするようになった。従姉はきれい好きだったので、掃除には厳しかった。おばさんもおばあちゃんもきれい好きだったが、彼女はそれ以上に厳しかったので、二人とも少しストレスになっていたようだ。お姉さんは、自分できれいになっていないと思うと、後から自分で掃除をやり直していた。毎日2、3回床や窓ふきをしていたくらいだ。Cさんに掃除をやらせても、お姉さんの気に入らないと、お姉さんがまた掃除をやり直す。食べた食器も「人任せにせず」自分で洗っていたというほど「清潔好き」の人だったようだ

部屋が二つあり、一つはおじさんが、もう一つはおばあちゃんとCさん・従姉が利用し使っていた。掃除は、おじさんの部屋もやった。昼間はおじさんの部屋でテレビを見ていた。トイレは家の外にあり、ドアはついていて。お母さんからはいつも「おばあちゃんは大変だから手伝ってね」と言われていた。家からおばあちゃんの家までは近かったのも、お母さんとよく行っていた。庭を掃除し、木の葉が落ちると掃いて集めてきれいにした。庭は畑になっていて、野菜や「果物」の世話をしたり、食べるのに必要な分を取ってきたりした。夏はトマト、キュウリ、唐辛子、長ネギ、秋には白菜などがとれた。お姉さんと一緒にトマトなど採って食事の材料にした。白菜などは、秋10月11月頃にキムチとして漬けたが、家の畑だけでは足りないので買ってきて漬けた。秋にはブドウも実った。

洗濯 自分の家では、好奇心で洗ったことはあるが、そのときは汚れが落ちていなくて、お母さんが洗い直した。普段は、お母さんが洗ってくれた。お母さんが韓国に出稼ぎに行ったときは、お父さんが洗濯をしてくれた。家にいるときは、「お父さんに悪い」などとは思わなかった。おばあちゃんの家に行ってから、洋服を自分で洗うことになった。自分の分は自分でやらなければと思った。お姉さんやおばあちゃんに「悪い」と思ったからだ。冬の着物は特に厚くて洗いにくいで、

お姉さんが手伝ってくれた。その頃は洗濯機がなくて、すべて手洗いで、洗濯板でこすって洗ったり、棒で叩いて洗ったりして今よりは大変だった。絞るのは、洗濯の機能はない「洗濯機のような電化製品」があり、それを利用した。自分のものだけ洗濯した。おばあちゃんの大きいものは、お姉さんが手伝ってくれてCさんも洗った。洗濯物を干すときには、お姉さんやおばあちゃんと一緒にやった。みんなで一緒にやるが多かった。おじさんのものは、おばあちゃんかお姉さんが洗っていた。洗濯物は、晴れていれば外に干していた。冬は寒く、干したものが凍ってしまった。

同居した優しい従姉 昼間や休みの日、土日などは、一緒に住んでいた従姉が食事を作ってくれることもあった。普段はおばあちゃんが作ってくれたが、何か別のも食べたいときなど、従姉が食事の手伝いをし、ご飯を炊いたり、たまにはおかずを作ったりしてくれた。トマトと卵炒めスープなども作ってくれた。おじいちゃんは、食事は全く作らず、部屋の掃除、洗濯（手洗い）をし、時には私（Cさん）の服も洗ってくれた。家事分担の大雑把な割合は、祖母が45%、従妹が35%、私が20%くらいだった。お姉さんと家事の分担するようになって、自分のやることをはっきり自覚し、前はやらなかったことを自分で意識してやるようになった。

学校で作文を書いたとき、お姉さんが「作文うまいね」とほめてくれたときはとても嬉しかったし、自信につながっている。お姉さんは、滅多にほめてくれることはなかったので、特に嬉しかった。作文にお姉さんのことも書いていたからかもしれない。お姉さんが私の誕生日に洋服を買ってくれた。友だちとお姉さんが買い物に行っても、自分の物は買わないで私（Cさん）の洋服やお土産ばかりを買ってきてくれた。お姉さんは友だちから「自分のものは買わないで、従姉妹（Cさん）の物ばかり買うんだね」と言われたりしていた。お姉さんの優しさが伝わり、私（Cさん）のことを心配してくれて、自分は愛されていると感ずることができた。お姉さんは、自分（Cさん）を強くしてくれ、安心感をもつことができた。お姉さんは就職していた。よく話す人で、（Cさんが）中学生のとき、職場の話などをよくしてくれ、テーブルで向き合って座って話しを聞いた。お姉さんは恋愛のことについても話し、相談してきたりした。一緒に住んで2年から2年半くらいすると次第に親しくなっていく。 （Cさんの）学校の話しも、家に帰ると二人でよく話した。お姉さんとの同居で、他人のありがたさや温かさが理解できるようになった。

自分で考える 以前は、宿題をやる時、何かわからない問題があれば、すぐ親に聞いた。母親のサポートが多かった。お母さんは、丁寧に教えてくれた。問題冊子の後ろに回答がついていて、答えを見てしまうCさんに「答えを見てはダメ」といい、考えさせ、それでもわからなければ、わかるように教えてくれた。特に算数の問題など。教えていて怒ったりすることはなかった。

親がいなくなったら、わからない問題を自分で「もうちょっと」考えて、それでもわからない場合には、従姉や、翌日先生に聞くようになった。わからないとすぐに人に聞くことが多かったが、お母さんが出稼ぎに出てからは、自分で時間をかけて何とか解決しようと粘り強く取り組むようになった。その頃は、先生が出す宿題が多く（プリントを配ることが多く）、一つの教科で7、8枚も宿題が出ることもあり、いろんな教科を合わせると何十枚にもなることが珍しくなかった。問題集もあった。中学一年生の頃は、大変ではなかったが、2、3年生になると宿題が増えて、それをこなすのが精一杯だった。

小学校の頃は、宿題はそれほど多くなく、漢字の書き取りで50回書く練習、10枚書く練習などの宿題が出た。夏休みや冬休みなどの長い休みでは、「夏休み課題帳」・「冬休み課題帳」が渡され（いくつもの科目が入った問題集）、連休等にはプリントの宿題が何十枚も出されて大変だった。お父さんは、朝鮮語、漢語などの文系科目や生物、地理、歴史などが好きだったのでよく聞いた。



お父さんは数学が苦手だったので聞かなかった。数学はお母さんが得意で、家にいるときはお母さんに聞いていた。いなくなってからは学校の先生に聞くことが多かった。お姉さんも、たまには教えてくれた。数学などたまに聞いてもお姉さんも苦手だったので、勉強を教えてもらう機会はありませんでした。日本語は、お姉さんも中学校で勉強していたので、教えてもらった。

父母との人間関係 両親が私のそばにいないで寂しかったが、だんだん慣れてきた。親とは手紙や電話で連絡していた。月2、3回くらい連絡を取りあった。手紙に写真も入れて送ったり、母さんからも出稼ぎ先の様子を写真で送ってきたりした。手紙や電話ではよいことだけを書いたり伝えたりした。それは、お母さんに心配をかけたくなかったからだ。電話は、最初はおじいちゃん、次いでおばあちゃん、そしてCさん、全部で1時間くらい一回に話していた。おばあちゃんの家に電話があった。

話す内容は、学校でのことや、友だちとのことなど、日常のことであった。作文大会で賞をもらったこと（小学校4年生、中学2年生のとき）、成績のこと、今回の期末テストはクラスで何番だったとか（お母さんが必ず聞いてきた、お母さんが代表して聞く）、学校の活動で歌ったりしたこと、一番親しい友だちのこと、誕生日パーティがあったこと、その時々様子などだ。

なるべく、親を安心させるような話をした。親も私には昇進のことや、給料アップのことなど、いいことだけを伝えてくれた。これはお母さんとお父さんの私に対する配慮、思いやりだったと思っている。お父さんとも電話で話したし、手紙は「お父さん・お母さん」に一緒に同じ宛名で書いて読んでもらった。お父さん・お母さんと離れて暮らすようになり、家族に対して相手の気持ちを考え、行動するようになった。自分でできるだけやれることはやるよう自覚するようになった。親に対する反発や不信感はなく、むしろ自分のことを思って、気づかってくれることがわかるようになり、信頼感が強くなった。また、親の自分に対する愛情、気づかいを強く感じ、ありがたいと思うようになった。これは、中学生や高校生になってから強く感じるようになった。小学校の頃は、親の気づかいを特に意識したことはなかった。洋服やCD、本、プレーヤー、靴などを中学校に入ってから送ってくれた。小学校の頃は、あまり送ってくれなかった。まだ出稼ぎに行っただけで、慣れていなかっただろうし、お金の面でも安定していなかったからだと思う。

親戚（おじさん、おばさん）との関係 以前はいつも親の後ろで静かにしていた。親が「出稼ぎ」でいなくなってから、自分から相手に直接接伝えることになった。何かお願いがある時も自分から言い出すことになった（積極性）。例えば、学校で親を集めて子どもの成績を報告し、半年間の様子を先生が親に話す面談があった。その時おじさんに「学校に来てもらえる？」と頼むと、「行くよ」と言って学校に来て先生と対応してくれた。中学校の3年間ずっとやってくれた。運動会などの時には、親が手伝いをすることがあるが、そういうときにはおじさんをお願いをした。おじさんは「俺行くのが当たり前でしょ」と言って気軽に行ってくれていた。おこづかいは、最初はおじさんから一週間分もらっていた。後からはおばあちゃんから一週間分としてもらっていた。お弁当代と交通費が中心だった。少しはおやつなどを買って食べた。だいたい足りていた。おばあちゃんには、何でも気軽に話したり、頼んだりした。普段は特にそれほど、気をつかって遠慮することはなかった。おばあちゃんが私を怒ることはほとんどなかった。お姉ちゃんにはよく叱っていたし、二人で喧嘩していた。後に尾を引くようなものではなかった。Cさんは一番下だったので彼女には厳しくはなかったが、内孫外孫に対する対応の違いというわけではなかったという。とはいえ、何を「やってもよい」というわけではなく「これはしない方がいい」「これはやってはいけない」など躾はちゃんとしてくれたそう。

先生との関係 中学校の時の担任の先生がすごくいい先生で、私（Cさん）のことを気づかっていただいた。風邪をひいた時に風邪薬を買ってくれて、勉強の指導も行った。また、お弁当をいただいた。冬、鼻風邪を引き、口で息をしていたら、薬を飲ませてくれた。これは、先生の家で試験の前など中学校の担任の生徒の希望者何人か集まって（お金を払う・後に禁止・今はない）勉強を教えてもらっていたときのこと。昼間にお弁当を買って食べるが、先生が私に（Cさん）に「お弁当買って食べて」といってお金をくれた。

最初は、おばあちゃんがお弁当を作ってくれたが、おばあちゃんが体調を崩し、お弁当を買って食べるようになった。先生から弁当を一回だけもらったことがあり、嬉しかった。「なんで」とびっくりした。また、Cさんの体調を気づかってくれ、「顔色良くないね」と聞いてくれていた。中学1年生の時は体重が38Kgほどで、体が丈夫ではなかった。先生に対する信頼、温かさ、気づかい、などを感じることができた。その時は、自分の大変さ、寂しさが大きく、先生の「優しさ」を感じる余裕がなかった。今思い返してみると「先生は私に気をつかい、配慮してくれていたんだ」と強く感じる。

最初1年生の頃は、荒れているクラスだった。Cさんは、うるさい子の隣の席になったが、ずっと静かにならなかった。席替えを先生にお願いしたら、すぐに次の日から変えてくれた。2年生後半になり、荒れている子は学校に来なくなったり、休んだりするようになり、クラスの子どもの数は20人くらいになった。残った子は、高校に進学するのでよく勉強した。一番荒れたクラスだった。中学校は、義務教育であったが厳しく、先生に対しては「怖い」というのが子どもの受け止め方であった。話を聞かないとよく怒っていた。運動会など、クラスでやる行事は、役割を決めたりみんなで飾りを作ったりして、特に混乱はなく運営されていた。

高校進学 小学校から中学校へ進学するときは、簡単な試験で入学した。中学校への入学は、いわゆる入学試験はなく、自分の住んでいる地域（戸籍のある地域）の中学校に、あるいは小学校の近くに進む。Cさんの場合は、小学校の友だちは皆すぐ近くの小学校に入学した。中学校の学区は小学校より広くなるので、いくつかの小学校から子どもたちが入学してくる。

日本語のクラスを選んで、第二外国語として日本語の勉強を始めた。中学校の頃にはドラマを見て記者になることが夢だった。将来は、優秀な記者になりたかった。記者になるためには、大学で勉強することが必要であった。そこで、大学にいくことに決めた。希望する大学に進学するためには、生徒の成績が良いレベルの高い高校に入学しなければいけないと思った。延吉市で入学の難易度が全体で2番目の高校を進学先に選んだ。その高校は、文化系の高校としては入学の難易度は1位だった。文化系の高校に進むことが希望であったため、その高校への入学を目標にして頑張った。親に電話で相談したら、「頑張ってね」といって励ましてくれ、とても嬉しかったし、勇気づけられた。親も出稼ぎで地元にはいないので、高校についての細かいことはわからない。そのため、自分で進みたい高校についての情報を調べたり集めたり、実際に高校に行ったり、お姉さんに聞いたりして、自分で何とかしようという気持ちが強かった。その意味で、自律・自立心が育ったと思う。

高校に進学するためには、吉林省の統一試験を受けなければならない。その成績によって、進学する高校が決まってくる。高校毎に統一試験の最低得点が公表され、その得点以上の成績を統一試験で獲得していれば、入学が決まる。入学を希望する高校への願書は、統一試験を受ける前に、事前に高校の名前だけ書いて提出する。

Cさんは、統一試験を受け、基準以上の良い成績がとれ、希望した高校に入ることができた。

高校生の時は、おじさん（お母さんの兄弟）の家に住んでいたが、彼はCさんにはあまり関心がなかったという。普段は、あまり話しをすることがなかったが、高校で父母会があると出席してくれ、先生と親たちがご飯を食べたり、お酒を飲んだりする父母会・懇親会に参加してくれた。父母会は、小学校中学校でもあった。必要な経費は親たちが集めていた。帰ってくると、「先生がほめていたよ」など、学校で先生と話したことなどを伝えてくれた。アルコールが入るとさらに優しくなりよく話しをしてくれた。普段はあまり話をしなかったのでもちよっと恐い感じもした。

**大学受験と家族の合流** 高校生活は楽しくなかった。学級の雰囲気もあまり良くなかった。高校1年生の時は、日本語専門のクラスと英語専門のクラスに分かれていた。2年生になると文系クラスと理系クラスに分かれ、日本語専門と文系専門の人が混じったクラスになった。Cさんは6組だったが、日本語専門の生徒は11人くらいいた。隣の7組には英語専門の生徒が11人くらいいて、日本語専門の人が多かった。そのため、Cさんは日本語の授業は7組で受けていた。英語専門の人は、その人たちでグループになり、日本語専門の人はその人たちだけでグループになる傾向が強く、英語専門の人とはあまり交流がなかった。隣の席の英語専門の人とは仲が良く、2年間隣同士だった。席が前の二人の男子も英語専門だったが、親しく話したりし、四人で一緒に近くに席を取っていた。進学相談は、先生とするが、あまり真剣に取り合ってくれなかった。自分で進学する大学の情報を探した方が確実で役に立った。進路については主にお母さんとお父さんに相談した。大学進学意識が生徒には強く、みんなが競争相手になっていて楽しくなかった。毎月模擬試験があり、その成績が全員発表された。数学何点、国語何点、さらに学年の順位、クラス内の順位が公表されていた。

高校3年生の時、親が韓国から戻ってきて、家を買って三人家族で暮らしを始めた。大学入試の準備でストレスがたまっていたが、親のサポートがあり、整った環境の中で安心して準備することができた。夜遅くまで勉強していると母親は果物やジュースをもってきたり、本を読みながら私のそばに一緒にいてくれたりした。大学の専攻を新聞学にするか経済関係にするか迷っていて、親と相談して専攻は「人事管理」にした。親が進路の相談にのってくれ、精神的には大きな支えになったと思う。大学は河北省（北京から電車で2時間30分位の所）の大学に進学した。大学進学は、全国統一試験を受けなければならない。試験を受ける前に、希望する大学に願書を出す。統一試験が終わると、各大学が必要な最低点を公表する。同じ大学でも何を専攻するかによって入学許可基準点が異なる。進学した大学から延辺の自宅までは、電車で24時間かかる（家から北京まで行き（約21時間）、北京から大学まで行くのに別の電車に乗り換える（約3時間））。

高校3年生の時に親と住むようになり、それまで自分で考えていた進路は、両親の意見に影響される面も大きかった。成績は親と一緒に住むようになって上がった。将来こういう進路が「女性にはいいよ」などのアドバイスももらえ、ある面では良かったが、自分の選択が少しはつきりしなくなった面もある。親と一緒に住むようになり、精神的に落ち着いて生活することができ、物理的・心理的に環境はよくなった。

**「こづかい」のやりくり** おばあちゃんから毎週20元のおこづかいをもらった。普段はもらったこづかいで大体足りた。たまに友たちの誕生日のプレゼントを買うなどすると、足りなくなった。そんなときには、おばあちゃんに正直に言ってお金をもらった。どのようなときにどのくらいのお金が必要になるのかを考え、ある程度計画的にこづかいを使うようになった。親と一緒に住んでいたときは、毎日必要な分ももらっていたが、おばあちゃんと住むようになり、一週間分を日曜日にまとめてもらった。一週間はもらったこづかいでまかなうよう、計画的に使うようになった。



とりあえず、何かを買ったりするときなども含めて、生活面全体で何でも自分でよく考えるようになった。もちろん電話や手紙で親と相談するし、祖母や従姉と相談するが、やはり自分のことは自分で真剣に考えるようになった。お母さんから私（Cさん）宛てにこづかいを直接送ってもらうことはなかった。友だちの中には、お母さんから通帳に振り込んでもらい、好きな物を自由に結構贅沢に買っている子がいた。その時は「いいな」とうらやましく思った。

中学生のとき、その頃よく行われていた誕生日パーティを開いた。おばあちゃんからお金をもらってパーティをやった。おばあちゃんも従姉も反対はしなかった。外の店でパーティをやり、カラオケもやった。お母さんが、おばあちゃんにそのことを聞いて、いくら使ったのか等も知り、お金を無造作に使ったことを叱られた。そのときから、毎日使ったこづかいの内訳を、ノートにつけるようにしなさいと言われ、つけるようになった。反省しながらノートをつけるようになった。あるとき先生にノート見られ、「すごいな、こんなに細かくつけているの」といわれ、恥ずかしかった。この習慣は大学2年生頃まで続いた。そのときは、自分でもお金を使いすぎたと思い、お母さんには悪いと思った。が、できれば、おばあちゃんには、おかあさんに黙っていてももらいたかった。おばあちゃんには何でも話していた。その後も、おばあちゃんと従姉は私に対してはいつも通りで一緒に生活した。

## 2. 「適応性」の発達

生活面 親の出稼ぎのため、親戚の家に住むことになった（2か所、中学三年と高校2年）。自分の家ではないので、多少は不便もあったが、その不便な環境に適応しなければならないので、環境に自分を合わせる力がついた。

日本留学した従姉 「留学先に一人で行ったら、勉強、生活は全部自分で考えなければいけない。日本語学校から大学への進学や引っ越しまで、全部自分で解決しなければいけない。だから、自立心や適応性が強くなる」。従姉と一緒に生活する中で、彼女のこうした経験を聞かせてもらって、自分でいろいろなことを処理してやっていかなければならないことを、おぼろげに知る機会になった。大変そうであったが、やりがいがあるように思えた。従姉は、日本に留学中、毎日アルバイトをやって、5時間くらいしか眠っていなかったと話していた。それを聞いて「すごいな」と思ったし、「自分もそんな生活してみたいな」と思った。私（Cさん）も同じような環境に行ったら、自分の力でやっていけると思い、やってみたいと思った。大学のときにもアルバイトはしなかったし、学校の前の食堂が1時間1円でアルバイトを募集していたが、あり得ない安さ（時給）だった。留学することによって国内では経験できないことを、自分で経験できることに興味が湧いた。日本語も勉強する良い機会になると思った。お母さんは、私に「日本に留学するんだよ」と小さいときから話していた。お姉さんからは、自分の生活を海外にまで広げることの面白さを感じさせてもらったし、自分でもできるのではないかと希望を持たせてもらった。

## 考察

「出稼ぎ」の現状 延吉市の朝鮮族の人たちの「出稼ぎ」と、後に残された「留守児童」の生育過程を留守児童当人の語りによって明らかにした。日本でいういわゆる短期の季節労働者とは異なり、「出稼ぎ」期間は数年にも及び、その間家に一回も帰らない親も多い。出稼ぎ者は男性に限らず女性にも多い。より高い賃金、収入を求めて大都市や隣国韓国に出る人が多いという。働き盛りの若者が地元を離れるから、人口は減少する。地域に残る女性が少なくなれば、男性は結婚

相手を見つけるのに苦労をすることになる。「外国人との結婚も多い」といい、さらに、「朝鮮族の晩婚化と少子化が、人口減少に拍車をかけている」(DailyNK Japan, 2016)。若者が少なくなれば、地域の高齢者の比率も高くなる。日本の過疎化問題と類似した面を持つことが推測できる。

**日本の過疎化との共通性** かつて、1980年代後半あたりから日本の農山漁村などの地方で若者の結婚難が大きな問題になったのと似ている。日本国内では配偶者を得ることが難しく、アジア諸国の女性との国際結婚が増えた。延吉市の場合、「大都市や韓国に去った朝鮮族の穴埋めを、周囲の貧しい農村出身の漢族がしているという図式となっている」(DailyNK Japan, 2016) というから、市全体の人口は補われていることになる。この点、日本の地方における過疎化と少子高齢化問題では、人口は減少の一途をたどり、集落あるいは自治体の機能を維持することがやがては困難になってしまうと予想されている点で異なる面がある。しかし、朝鮮族として自治区を維持する観点からすれば、あまりに激しい人口の流出・減少は、厳しい状況を生み出すと予測できる。延吉市の「出稼ぎ」による朝鮮族の過疎化と日本の地方の過疎化には重なるところがあり、近未来を展望する資料として役立つ。

**親密な家族・親族関係と交流** Cさんの事例から、家族・親戚関係が日本と大きく異なることがわかる。日本も大家族制の特徴を持つ社会とはいわれるが、事例にあるように叔父(伯父)・叔母(伯母)に子どもの養育を一時的であれ依頼することはほとんどない。盆暮れに行き来し交流する程度の人間関係、親戚付き合いが多い。延吉市の「出稼ぎ」と「留守児童」の生活が混乱なく営まれる背景には、朝鮮族の親密な「家族関係・親族関係」があるからであろう。2014年に私たちが訪問した家庭では、低学年の小学生(女兒)と男の子(幼兒)を祖父母(子どものお祖父さん・お祖母さんにあたる)が世話をしていた。娘とその夫は、韓国に「出稼ぎ」に出ていて家にはいない。この場合は、実母に預ける例で、時には日本でもある例かもしれない。いずれにしても、朝鮮族の人たちの間で見られる、幅の広い親しい人間関係と交流は、「出稼ぎ」と「留守児童」の関係を理解する上で重要である。Cさんが語る「誕生会」や「運動会」の懇親会の様子から、間口の広い屈託のない日常の交流があることがよくわかる。

**中国の貧困問題** 一般に「留守児童」と言えば、中国の貧困問題と背中合わせのものとして報道されることが多い。最近では、保護する養育者が身近にいない「留守児童」が、犯罪の被害者になる事件が多いことが危惧されている。「両親の多くが都市に出稼ぎにでる中国で、内陸農村部に残された子どもを取り巻く状況が深刻化している。いわゆる「留守児童」の問題だ。留守児童の大半は祖父母や親戚の元に預けられているが、無防備な状態で犯罪の危険にさらされる子どもも多い」(CNN, 2014)。社会的に放置された状態にある子どもがいるのかもしれない。「両親とも家にいない例は、18歳以下で3000万人。200万人の子どもは、大人の保護者がいない状況で暮らしており、自衛を余儀なくされている」(CNN, 2014)。「留守児童5千万人減 中国政府発表に疑問の声が続出」(朝日デジタル、2016)。統計数値が正確であるかはっきりしないが、相当数の子どもが十分な養育や世話を受けられない「留守児童」となっていることは確かであろう。

**農村部「留守児童」との違い** 農村部からの出稼ぎ労働者は、「農民工」と呼ばれ、次のように説明されている。「農村出身の出稼ぎ労働者を中国語でこう呼ぶ。中国ではもともと都市住民と農村住民とで戸籍上の扱いを区別し、人口移動を厳しく制限してきた。一方、80年代以降の経済成長は、沿海地域を中心に都市部の工場が多くの労働力を必要としたため、農村戸籍のまま都市部に滞在する出稼ぎ者が増加。メード・イン・チャイナの担い手となった。」(朝日新聞、2009)。

内陸部の農村部から大都市への親の「出稼ぎ」、それに伴い子どもが家に残される。この子ども

たちを指して「留守児童」と呼ぶことが多い。上述の事情に照らしてみると、延吉市の場合、農村部ではなく市街地であり、Cさんの育ったところは市内である。大都市への移動もより高い収入、質の高い教育や文化を求めることに動機づけられている。留守家庭の子ども世話・養育も家族・親族が密に連携・連絡し合い行っている。したがって、延吉市の「出稼ぎ」は、中国農村部から大都市へ仕事を求めて移動する「農民工」などの人々の出稼ぎとは質的に異なるものである。

「分離」の心理的影響 親が「農民工」として都市部へ出稼ぎに出ることは、地元に残される「留守児童」にどのような影響を及ぼすのか。本研究の中心テーマでもあった。農村部における「留守児童」については、自殺をしたり（産経ニュース、2015）、大人の目が行き届かず子どもが犯罪の被害者（性被害など）になったり（CNN, 2014）、親の不在による否定的な影響が大きい。「留守児童」が親と離れて過ごす期間が数年間にも及び、心理的な面にも大きな影響を及ぼす可能性がある。とりわけ、小学生、中学生、高校生の時期は、心身の成長・発達が著しく、内面的世界を豊かにしつつ、自分としてアイデンティティ確立するために葛藤する時期である。心身の大きな変化を受けとめ受容しつつ、同時に進路選択を迫られる。人それぞれ悩みは異なるが、周囲にすぐに相談できる親が存在することは大きな意味を持つ。Cさん自身が、母親や父親には、「楽しいこと、喜ぶことを話す。困らせ心配させるようなことは決して話さない」と語っている。Cさんは、電話による親との相談、そして学校の先生の配慮などが大きな力になったと言っている。中学生や高校生の「留守児童」だった時点では気がつかないこともある。大学生の時や日本留学をした後で当時を振り返ることで、親や教師のことばや態度の意味を改めて考え、「優しさ」や「心づかい」に新たに気がつくこともある。親の不在の影響は、長期に及び発現の仕方も直線的・一面的ではなく、可塑的に変化するのではないだろうか。

流れる時間の長さ 「長いあいだ両親と離れて暮らすことで、感情面でのはりこりも生まれる。子どもは自分が家族の負担になっていると悩み、出稼ぎ労働者の側でも親失格だと自責する。親に見捨てられたと恨み、電話に出ない子どもまでいる。こうした留守児童の欠乏感が将来、中国社会に暗い影を落とすのではないかと広く懸念されている」（CNN, 2014）。Cさんがお母さんと再会したとき、「違和感」をもったと話している。素直なことばであり、率直な気持ちであろう。長期間の分離がもたらす、再会時の「戸惑い」は当然であるし、それが自然なことである。小学校の時期から何年間もずっと顔を合わせていないとすれば、子どもは外見から内面まで「すっかり」変化し、大人へと脱皮している訳だから。子どもにとっての親の変化も同様である。こうした時間の負の効果は、深刻でありどのように克服するかは大きな課題である。体つき、顔かたち、話す声、しぐさ、すべてが、心に描いたイメージと照合される。記憶やイメージと現実の再会をすり合わせるだけでは、「違和感」を埋めることはできないだろう。

事態の理解 Cさんは、お母さんが「出稼ぎ」に出るとき「家庭の事情をある程度察していた」と話している。十分理解するにはCさんは幼すぎたと思うが、子どもなりに納得していたことは、その後流れる長い年月の意味づけと、両親への信頼感・安心感を揺るぎないものにしたと考えられる。この両親への安心感が、祖母に対する安心感・信頼感と相まって、Cさんは寂しさを抱えながらも、自分に対しても周囲の人に対しても心を開き、前向きに関わることができたのではないだろうか。

#### 引用文献

朝日新聞 2009 農民工 3月3日



- (<https://kotobank.jp/word/%E8%BE%B2%E6%B0%91%E5%B7%A5-887880%E6.9C.9D.E6.97.A5.E6.96.B0.E8.81.9E.E6.8E.B2.E8.BC.89.E3.80.8C.E3.82.AD.E3.83.BC.E3.83.AF.E3.83.BC.E3.83.89.E3.80.8D>)
- 朝日新聞デジタル (2016) 「留守児童5千万人減」中国政府発表に疑問の声が続出  
11月15日19時33分 (<http://www.asahi.com/articles/ASJCC5638JCCUHBIO25.html>)
- 坂西友秀 (1995) いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究 11(2)、105-115,
- 坂西友秀 (2015) 「教育の心理學」に関する研究と二つの世界大戦(Ⅱ) —戦時における臺灣・中國・フランスと日本の関わりを例に— 埼玉大学紀要 教育学部、64(1):23-45
- 張凜音 (2011) 中国農村部の留守児童、約8割が心理的な問題あり 大紀元  
8月25日 (<http://www.epochtimes.jp/jp/2011/01/html/d92364.html>)
- 中国まるごと百科事典 (2014) (<http://www.allchinainfo.com/map/asia-china/asia>)
- 中華人民共和国駐大阪総領事館 (2013) 国土・人口・民族 7月5日  
(<http://osaka.china-consulate.org/chn/zt/zggk/t536214.htm>)
- 中華人民共和国駐大阪総領事館 (2014) 国土・人口・民族  
(<http://osaka.china-consulate.org/chn/zt/zggk/t536214.htm>)
- CNN 2014 中国で深刻化する留守児童問題 6100万人が「置き去り」に 3月30日  
(<https://www.cnn.co.jp/world/35044817.html>)
- DailyNK Japan (2016) 中国朝鮮族、人口減少の訳 8月27日  
(<http://dailynk.jp/archives/72886>)
- 人民網日本語版 2011年10月12日 留守児童にメディアが注目、社会的問題に  
(<http://j.people.com.cn/94475/7615344.html>)。
- 金銀実 (2012) 韓国在住の中国朝鮮族をたずねて—問題発見の旅— 日本アジア研究 第9号 63-73.
- 金銀実 (2013) 急激な社会変動に翻弄される中国朝鮮族—韓国出稼ぎ経験のある農民夫婦からのききとり 日本アジア研究10, 157-172
- 金明姫・浅野慎一 (2013) 韓国における中国朝鮮族の生活と社会意識 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 第6巻1号 53-62
- 北村豊 (2012) 農村の留守児童たちの悲しい「子供の日」—明暗を分ける都市部と農村部の境界線 日経ビジネスオンライン 6月8日  
(<http://business.nikkeibp.co.jp/article/world/20120606/233022/?P=1>)
- 吉林政府ネットワーク管理事務室管理営業 (2013) 延辺博物館が落成し正式に对外开放  
([http://japanese.jl.gov.cn/xw/201209/t20120904\\_1268521.html](http://japanese.jl.gov.cn/xw/201209/t20120904_1268521.html)、2012/09/04  
出所: 吉林省政府ホームページ、より)
- 日本貿易振興機構(ジェトロ) 大連事務所 (2012) 延辺朝鮮族自治州概況  
([https://www.jetro.go.jp/world/asia/cn/tohoku/pdf/overview\\_yanbian\\_201205.pdf#search='%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%88%E3%83%AD+%E5%BB%B6%E8%BE%BA'](https://www.jetro.go.jp/world/asia/cn/tohoku/pdf/overview_yanbian_201205.pdf#search='%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%88%E3%83%AD+%E5%BB%B6%E8%BE%BA'))
- 日本経済新聞 (2017) HAAD報復長期化 韓国企業にダメージ 7月27日  
([https://www.nikkei.com/article/DGXLASGM26H49\\_W7A720C1FF1000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASGM26H49_W7A720C1FF1000/))
- 産経ニュース (2015) 中国トンデモ事件簿 児童4人が自殺、父は出稼ぎ、母は家出…繰り返される「留守児童」めぐる悲劇 7月3日  
(<http://www.sankei.com/premium/news/150703/prm1507030002-n1.html>)
- 州委办公室 (2011) 关于延边州“留守儿童”情况的调研报告  
(<http://wenku.baidu.com/view/2075f31fff00bed5b9f31db6.html>)
- 武吉次郎 (2008) 武吉次郎先生の「新語が映す中国」・32 「留守児童」 中国経済新聞 12月1日掲載  
([https://www.toho-shoten.co.jp/business/gakushu/singoga/singoga\\_32.pdf#search=%27%E4%B8](https://www.toho-shoten.co.jp/business/gakushu/singoga/singoga_32.pdf#search=%27%E4%B8))

%AD%E5%9B%BD%E7%B5%8C%E6%B8%88%E6%96%B0%E8%81%9E+%E7%95%99%E5%AE%88%E5%85%90%E7%AB%A5%27)

山本忠士（2011）延辺朝鮮自治州の日本語教育 アジア研究所・アジア研究シリーズ NO.77 「延辺朝鮮族自治州の社会・経済の変容と適応」（西澤正樹代表） 87-113

読売新聞（YOMIURI ONLINE）2013年7月3日 両親出稼ぎ無表情な「留守児童」…中国で増加（<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/news/20130703-OYT8T00898.htm>）

在日中国大使館（2009）中国概況 行政区画と都市  
（<http://www.china-embassy.or.jp/jpn/>）

（2017年10月26日提出）

（2017年11月18日受理）

# **Influence of depopulation on children (overseas case) ( I )**

China • Yanbian Korean Autonomous Region Yanji City  
Case Study of “Away children” (Study 1) • Research Study (study 2)

**ZHANG Lihua**

**BANZAI Tomohide**

Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

The purpose of this research is to clarify the present situation where parents migrate overseas or metropolitan areas leaving children at school age seeking economic income, and the influence of parent's absence on children through the eyes of the child (“Away child: child whose parent is not living together”). We selected Yanji city of Youanbian Korean autonomous state in the north-eastern part of China as research site. This is because the Korean people's outflow due to “migration” has progressed remarkably, and the population is rapidly decreasing. The decrease in the total population means that the number of residents in the area will decrease, resulting in the consolidation and elimination of administrative agencies.

Also, the number of children is decreasing, and consolidation and elimination of elementary school and junior high school progresses. In Japan too, depopulation of rural areas and intertwined areas has expanded, it has long been pointed out the difficulty of maintaining administrative organizations and the difficulty of maintaining residents' lives. The issue of “depopulation” of Yanji city is in common with the “depopulation” problem of Japan in that population is concentrated in urban areas in search of economic income. The declining birthrate and increasing aging population in Japan will rapidly progress in the near future. How do we conceive the future of the lives of the local community and residents and how to open up the perspective on children's education?

We believe that the case of Yanji city will give suggestions on how we can resolve to these problems. Large part of the parents live apart from children of school age for years due to “migrant work”. The effect of this “separation” between parent and child on mental and psychological development of children was clarified by interview. We discussed the results from the child's developmental point of view.

**Key words:** Yonban Korean autonomous state, away child, parents' migrant, depopulation, development of child